

< -

ISSN 1343–3555 CODEN KEHOFI

研究所報告

No.21 (2007.9)



No.21(2007.9)

次 B 技術報告及び技術論文概要 1 技術報告 1. 速度論的解析モデルに基づいたガス浸炭の制御法の提案 石神逸男・水越朋之・横山雄二郎 9 星野英光・三浦健一・浦谷文博 2. 新規合成法によるポリイミド微粒子の調製 舘 秀樹 17 平松初珠・石島 悌・中辻秀和 23 3. ギガビットネットワークを中心とした所内 LAN の再構築 4. 高分子製品中の有害物質のスクリーニング 浅澤英夫・塚本崇紘 29 5. 輸送包装の標準化と 3R 寺岸義春 33 技術論文 1. 電子サイクロトロン共鳴プラズマを用いたスズ添加酸化インジ 筧 芳治·佐藤和郎·北畠顕英 43 ウム薄膜の表面改質 小川倉一・中島嘉之・中野信夫 足立和俊・山口勝己・本田索郎 2. 超精密加工機における位置決めの高精度化 47 -環境補正装置によるレーザ測長誤差低減-3. スクラッチ試験と180 度曲げ試験による DLC 膜の密着性評価法 中村守正・三浦健一・松岡敬 53 平山朋子 の検討 4. インテリジェントな徐放性システムを利用した新しい殺菌方法 増井昭彦・藤原信明 59 の開発 一切削油から分離した P. aeruginosa のプロテアーゼの Ivanka Karadzic 精製とその性質-5. 高密着力 Ti-Al 溶射皮膜の開発 足立振一郎 63 6. 5軸摩擦攪拌接合装置の開発(第2報) 大川裕蔵・谷口正志・杉井春夫 69 丸谷洋二 西村正樹・赤井智幸・嘉門雅史 7. 線状高分子混合処理土における靱性向上メカニズムの検討 73 8. 酸化鉄を用いる環境中有機化合物分解法の開発 林 寛一・中島陽一・太田清久 79

他誌掲載論文等概要

1.	ものづくり企業に対する地方公設試験研究機関の技術支援 大阪府立産業技術総合研究所における一例	石神逸男	87
2.	溶解性パラメータとプラスチックの環境応力割れの相関性につ	水谷 潔	87
	いて		
3.	アーク溶射された銅の酸化と皮膜構造	村上健児・藤田直也・足立振一郎	87
		三宅秀和・中嶋英雄	
4.	レーザ測長誤差低減のための環境補償技術	足立和俊・山口勝己・岩井英樹	87
	- 環境補正装置の開発と超精密加工機への適用-		
5.	超精密加工機におけるレーザ測長誤差低減のための環境補正装	足立和俊・山口勝己・本田索郎	88
	置の開発	岩井英樹・大川裕蔵・島田尚一	
6.	高出力炭酸ガスレーザビーム整形のための銅曲面上マルチレベ	萩野秀樹・朴 忠植・蛯原哲弘	88
	ルCGH	赤松宏明・菊田久雄・岩田耕一	

7.	新しい球状炭化物材料の開発	橘堂忠	88
8.	高マンガン球状炭化物鋳鉄のサンドエロージョン摩耗特性	新巴雅称・清水一道・桃野 正	89
		松元 秀人・橘堂 忠	
9.	ステンレス球状炭化物鋳鉄のバナジウム系炭化物の形状に及	西内滋典・橘堂 忠・松元秀人	89
	ぼす溶解条件の影響		
10.	高分子基質中における染料分子の改良二元収着拡散機構に基	森實弘司・河原 豊・武村 守	89
	づく拡散現象の解析システムの開発	横山雄二郎	
11.	高分子基質への染料分子の拡散現象の二元収着拡散機構	森實弘司・河原 豊・横山雄二郎	90
		武村守	
12.	Fabrication of In-Situ Intermetallic Compound Dispersed Aluminum	松室光昭・橘堂 忠	90
	Matrix Composites by Addition of Metal Powders		
13.	Formability of Friction Stir Welded and Arc Welded 5083 Aluminum	平田智丈・小栗泰造・萩野秀樹	90
	Alloy Sheets	田中 努・Sung Wook Chung・瀧川順庸	
		東 健司	
14.	Influence of Friction Stir Welding Parameters on Grain Size and	平田智丈・小栗泰造・萩野秀樹	91
	Formability in 5083 Aluminum Alloy	田中 努・Sung Wook Chung・辻川正人	
		瀧川順庸・東健司	
15.	Relationship between Deformation Behavior and Microstructural	平田智丈・田中 努・Sung Wook Chung	91
	Evolution of Friction Stir Processed Zn-22wt%Al Alloy	瀧川順庸・東健司	
16.	Superplastic Properties and Microstructure of Friction Stir Welded	田中 努・平田智丈・Sung Wook Chung	91
	Joints of Zn-22wt% Al Alloy	瀧川順庸・東健司	
17.	イオン交換膜のめっきプロセスへの応用	森河 務・中出卓男・横井昌幸	92
18.	Fe-W 合金めっきの溶融スズに対する濡れ性	森河 務・中出卓男・横井昌幸	92
19.	DLC Coating on Mg-Li Alloy	山内尚彦・上田順弘・岡本昭夫	92
		曽根 匠・辻川正人・沖 幸男	
20.	Effect of Molybdenum on Hardness of Low-Temperature Plasma	辻川正人・野口慎一・山内尚彦	93
	Carburized Austenitic Stainless Steel	上田順弘・曽根 匠	
21.	Acceleration of Carbon Diffusion by Molybdenum in Low-Temperature	辻川正人・野口慎一・山内尚彦	93
	Plasma Carburizing of Austenitic Stainless Steel	上田順弘・岡本 明・曽根 匠	
		中田一博	
22.	DLC Film Coating on Plasma-Carburized Austenitic Stainless Steel	上田順弘・山内尚彦・曽根 匠	93
		岡本 明・辻川正人	
23.	DLC 膜のトライボロジー特性に及ぼす環境条件の影響	三浦健一・出水 敬・中村守正	94
		石神逸男	
24.	Induced Codeposition Behavior of W and P in Ni-W-P Alloys from	中出卓男・森河 務・横井昌幸	94
	Citrate Bath	太田清久	
25.	Ni-W-P 合金めっきの高温硬さ特性	中出卓男・横井昌幸・森河 務	95
		太田清久	
26.	チタンの放電加工による表面改質	塚原秀和	95
27.	Improvement of Adhesive Strength of Ti-Al Plasma Sprayed Coating	足立振一郎・中田一博	95
28.	Study of Bonding Strength of Plasma-Sprayed Ti-Al Coating on Mild	足立振一郎・中田一博	95
	Steel Substrate		
29.	燃焼合成法による Ti-Al 系金属間化合物の作製と球状黒鉛鋳鉄	池永 明・山川 亮・中平 敦	96
	への接合	岡本 明・曽根 匠	. 5
30.	Effects of Substrate Bias Voltage on Projection Growth in Chromium	榮川元雄・三浦健一・横井昌幸	96
	Nitride Films Deposited by Arc Ion Plating	石神逸男	. 5

31.	レーザ発振パルスの制御技術開発	中西 隆	96
32.	トレーサビリティシステムの紹介	竹田裕紀	97
33.	5 軸摩擦攪拌接合装置による曲面接合	大川裕蔵・谷口正志・杉井春夫	97
		丸谷洋二	
34.	メンテナンスフリーを目指した適用時間限定型 greylisting による	石島 悌・平松初珠・林 治尚	97
	迷惑メール対策とその効果		
35.	携帯電話を活用した農作物トレーサビリティ支援システム	新田 仁・竹田裕紀・宝珍輝尚 越村惣次郎・松下 隆	98
36.	文字情報の画像化による携帯電話向け多言語情報配信システム	平松初珠・石島 悌・堀 一成	98
	- 在留外国人向け災害情報提供に関する提案-	高階美行	
37.	振動試験機の加振性能	高田利夫	98
38.	Metoring と QOL の向上	木村裕和	99
39.	蓄積疲労評価型による振動試験システムの提案	中嶋隆勝・津田和城・川田浩二	99
		山内佳門	
40.	Determination of Carbon Nanocoil Orientation by Dielectophoresis	友兼遼太・藤山幸広・田中健一郎	99
		秋田成司・東 勇吾・潘 路軍	
		野坂俊紀・中山喜萬	
41.	音響解析による共振現象検出手法	君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子	99
42.	包装品の非線形ガタ振動に関する実験的検証	津田和城・中嶋隆勝・斎藤勝彦	100
43.	パワースペクトル密度	津田和城	100
44.	磁性材料と磁気特性	日下忠興	100
45.	電子デバイス分野への応用	岡本昭夫	101
46.	フッ素系樹脂を用いた超音波マイクロアレイセンサの特性改善	田中恒久・李 昇穆・宇野真由美	101
		井上幸二・青柳誠司・山下 馨	
		奥山雅則	
47.	電気特性評価 -液晶など-	村上修一・内藤裕義	101
48.	Electronic Structure of a Glassy Poly(9,9-Dioctylfluorene) Thin Film	井亀 諭・小林隆史・村上修一	102
	Determined Using Linear and Nonlinear Spectroscopies	内藤裕義	
49.	プラズマスパッタ法による Pt-C 複合薄膜の作製と構造評価	松本茂生・岡本昭夫・野坂俊紀	102
50.	薄膜光干渉発色布(玉虫の翅構造)	野坂俊紀	102
51.	アクリルシリコーン/シリカ・ナノ複合材料の撥水性 (2)	木本正樹・日置亜也子・西田英夫	102
	撥水膜の表面特性におよぼす合成時における水の添加効果	有本邦夫・池田能幸・佐々木宗夫	
52.	アクリルシリコーン/シリカ・ナノコンポジットを用いた超撥	木本正樹	103
	水表面		
53.	ナノミクロポリイミド微粒子の開発	浅尾勝哉	103
54.	機能性ポリイミド微粒子の開発と応用性	浅尾勝哉	103
55.	Number of Walls Controlled Synthesis of Millimeter-Long Vertically	Supriya Chakrabarti ・ 久米秀樹	104
	Aligned Brushlike Carbon Nanotubes	潘 路軍・長坂岳志・中山喜萬	
56.	Preparation of Micron-Sized Aromatic Polyamide Particles Using	吉岡弥生・浅尾勝哉・山元和彦	104
	Ultrasonic Irradiation	舘 秀樹	
57.	New Method for Fabricating Aromatic Polyamide Particles with a	吉岡弥生・浅尾勝哉・山元和彦	104
	Narrow Particle Size Distribution	舘 秀樹	
58.	Preparation and Characterization of Nanoscale Aromatic Aolyamide	吉岡弥生・浅尾勝哉・山元和彦	105
	Particles	舘 秀樹	
59.	Structural Phase Transitions of Aliphatic Nylons Viewed from the	田代孝二・竹内一浩・太田康明	105
	Simultaneous Measurements of WAXD and SAXS	塙坂 真・橋田朋子・吉岡弥生	

		Chellaswami Ramesh	
60.	多孔性ポリイミド微粒子の作製	舘 秀樹・浅尾勝哉・山元和彦 吉岡弥生	105
61.	Degradation of Carbofuran by Cu/L-Ascorbic Acid/H $_2O_2$ System	Farzana Ferdoush・勝又英之・金子 聡 鈴木 透・太田清久・呼子嘉博	106
62.	Degradation of Diazinon in Aqueous Solution by V(VI)/H ₂ O ₂ System	勝又英之・中尾英之	106
		Farzana Ferdoush・金子 聡	
		鈴木 透・太田清久・呼子嘉博	
63.	Purification and Characterization of an Alkaline Lipase from <i>Pseudomonas</i>	Ivanka Karadzic・増井昭彦	107
	aeruginosa Isolated from Putrid Mineral Cutting Oil as a Component of	Lidija Zivkovic・藤原信明	
	Metalworking Fluid		
64.	ジオシンセティックス	赤井智幸	107
65.	線状高分子混合の材料特性における材質の影響について	小竹 望・平田昌史・赤井智幸	107
		西村正樹・山本正人・嘉門雅史	
66.	Interface Shear Stress Parameter Evaluation for Landfill Liner Using	M. Saravanan・嘉門雅史・H. A. Faisal	108
	Modified Large Scale Shear Box	勝見 武・赤井智幸・松本 哲	
		乾 徹	
67.	The Study of the Durability about the Triple Liner System	佐藤 毅・赤井智幸・石田正利	108
	-The Loading Tests about Slope Hydraulic Barrier Function in the Sea	野村忠明・嘉門雅史	
	Area Landfill Sites-		
68.	A study on the Durability of the Triple Liner System	亀井大樹・浅田英幸・前田 敏	108
	-Stress and Deformation Analysis by Finite Element Method-	上田正樹・赤井智幸・嘉門雅史	
69.	ジオシンセティックス1 製品の種類と使用される素材	赤井智幸	109
70.	ジオシンセティックス2 要求される機能と代表的な適用例 (1)	赤井智幸	109
71.	ジオシンセティックス3 要求される機能と代表的な適用例 (2)	赤井智幸	109
72.	ジオシンセティックス4 材料特性の評価方法	赤井智幸	110
73.	Required Performance of Fibers for Hybrid Clay Barrier	小竹 望・平田昌史・赤井智幸	110
		西村正樹・山本正人・嘉門雅史	
74.	廃棄物最終処分場キャッピング用複合シートの機能評価と施工	西村正樹・赤井智幸・和田昭太	110
	耐久性評価	楠部義夫・嘉門雅史	
75.	廃棄物処分場に設置された一体型複合遮水シートの破損に対す	石田正利・佐藤 毅・西村正樹	111
	る耐久性評価に関する研究	赤井智幸・根岸聖司・嘉門雅史	
76.	Characteristics and Construction Durability on Hybrid Geosynthetics	西村正樹・赤井智幸・根岸聖司	111
	for Capping of Landfill Site	石田正利・和田昭太・楠部義夫	
		嘉門雅史	
77.	リン酸化染料を用いた高染色堅ろう性革の開発のための染色条 件の検討	稻次俊敬	111
78.	皮革の染色方法と最近の研究紹介	佐藤恭司	112
79.	皮革製品から放散する揮発性物質について	佐藤恭司・奥村 章・稲次俊敬	112
		道志 智・藤田恵美・角田由美子	
80.	リン酸化染料の試作	佐藤恭司	112

口頭発表概要

Γ

1.	ナノ加工・計測を実現する環境補償技術の開発	○山口勝己・足立和俊・本田索郎	115
		他	

2.	放電/切削ハイブリッド加工システムによる高能率微細加工	○南 久・増井清徳	115
3.	放電/切削ハイブリッド加工システムによる高能率微細加工	○南 久	115
4.	放電加工による焼結ダイヤモンド工具の成形加工	○南 久・塚原秀和・藤原久一	115
		渡邊幸司・増井清徳・他	
5.	新しい高能率微細加工への挑戦	○南 久・渡邊幸司・増井清徳	115
6.	AZ31 マグネシウム合金のプレス成形シミュレーション	○白川信彦・宮田良雄・中本貴之	115
7.	Multilevel Computer Generated Hologram on a Curved Surface for	○萩野秀樹・朴 忠植・岩田耕一	115
	High Power CO ₂ Laser Beam Shaping	他	
8.	レーザ表面処理用回折型ビーム整形素子の設計と試作	萩野秀樹・○他	115
9.	通電切削による難削材の超精密切削加工	○本田索郎・山口勝己・足立和俊	116
		他	
10.	炭素鋼粉末による金属 RP 造形物の高強度化	○中本貴之	116
11.	炭素鋼粉末による金属ラピッドプロトタイピング造形物の高強 度化	○中本貴之	116
12.	炭素鋼粉末のレーザラピッドプロトタイピングにおける炭素量	○中本貴之・白川信彦・宮田良雄	116
	の影響	他	
13.	放電/切削・研削ハイブリッド加工による高能率微細加工	○渡邊幸司・南 久・塚原秀和	116
		藤原久一・増井清徳	
14.	放電/研削ハイブリッド加工による超硬合金の微細仕上げ	○渡邊幸司・南 久・藤原久一	116
	-第2報 軸付電着ダイヤモンド砥石の放電ツルーイング-	増井清徳	
15.	放電/研削ハイブリッド加工による超硬合金の微細仕上げ	○渡邊幸司・南 久・他	117
16.	放電/研削ハイブリッド加工による超硬合金の微細仕上げ	○渡邊幸司・南 久	117
	-小径軸付電着ダイヤモンド砥石の放電ツルーイング-		
17.	カーボンナノチューブの連続成長に関する基礎的研究	水越朋之・櫻井芳昭・石神逸男 ○他	117
18.	カーボンナノチューブの連続成長に関する新手法の研究	水越朋之・櫻井芳昭・石神逸男 ○他	117
19.	カーボンナノチューブ生成のための炭素原料ガス分離の検討	水越朋之・櫻井芳昭・石神逸男 ○他	117
20.	炭素透過法によるカーボンナノチューブの新製法の研究	水越朋之・櫻井芳昭・石神逸男 ○他	117
21.	V 溝側壁部の X 線応力測定法	○小栗泰造・山口勝己・他	118
22.	Two Pass FSW Joint of Magnesium Alloy	小栗泰造・〇他	118
23.	プロパンを用いた真空浸炭における炭素流入速度の測定	○星野英光・水越朋之・横山雄二郎	118
		石神逸男	
24.	鋳造品に関する相談事例	○武村 守・橘堂 忠	118
25.	Formability of Friction Stir Welded and Arc Welded 5083 Aluminum	○平田智丈・小栗泰造・萩野秀樹	118
	Alloy Sheets	田中 努・他	
26.	Superplastic Properties and Microstructure of Friction Stir Welded	○田中 努・平田智丈・他	119
	Joints of Zn-22wt%Al Alloy		
27.	環境対応型工業用クロムめっきの開発(その1)	○森河 務・中出卓男・西村 崇	119
	-3価クロム浴の過去・現在、そして未来に向けて-	左藤眞市	
28.	Effect of Molybdenum on Case-Depth of Low-Temperature Plasma	上田順弘・山内尚彦・曽根 匠	119
_	Carburized Austenitic Steel		
29.	オーステナイト系ステンレス鋼の低温プラズマ浸炭処理	上田順弘・山内尚彦・曽根 匠 〇他	119

30.	UBM スパッタ法により形成した DLC 膜の硬さと摩耗特性の関係	○三浦健一・中村守正	119
31.	クロム代替リン含有合金めっきの皮膜特性および析出挙動	○中出卓男・横井昌幸・他	120
32.	Mechanizm of Bonding between Plasma Sprayed Ti-Al Coating and Al_2O_3 Coating	○足立振一郎・他	120
33.	Study of Bonding Strength of Plasma Sprayed Ti-Al Coating on Mild Steel Substrate	○足立振一郎・他	120
34.	プラズマ溶射アルミナ/ Ti-Al 二層皮膜の軟鋼基材上の密着機構	○足立振一郎・他	120
35.	Effect of Plasma Spraying Parameters on Anisotropic Feature of	○足立振一郎・他	120
	Mechanical Property of Plasma Sprayed Al ₂ O ₃ Coating		
36.	軟鋼基材上 Ti-Al /アルミナ二層溶射皮膜の腐食特性	○足立振一郎・他	120
37.	高周波誘導加熱による Ti-Al 系金属間化合物の燃焼合成コーティ ング	岡本 明・曽根 匠・〇他	121
38.	自己燃焼合成法による Cu-Al-Ni 系合金の鉄鋼への接合と防振性 付与効果	岡本 明・〇他	121
39.	アークイオンプレーティング法による CrN 皮膜中のドロップ レット数に及ぼす被覆条件の影響	○榮川元雄・他	121
40.	アークイオンプレーティング法における皮膜の表面モルフォロ	○榮川元雄・他	121
	ジーに及ぼす被覆条件の影響		
41.	構造化された PtNi 合金微粒子の作製	○西村 崇・横井昌幸・森河 務 他	121
42.	DLC 膜へのスクラッチ試験による密着エネルギー算出モデルの 適用	○中村守正・三浦健一・他	122
43.	UBM スパッタ法により形成した DLC 膜の残留応力に及ぼす被 覆条件の影響	○中村守正・三浦健一・他	122
44.	段差乗り越え機構をもった外出支援用カート	○杉井春夫・吉竹正明・朴 忠植 中谷幸太郎・北川貴弘・崔 鎭圭	122
45.	ホームページを簡単・素早く更新して、最新情報の提供を!(「Tech テク-NET」を体験してみませんか?)	○中西 隆	122
46.	ブログって何?	○中西 隆・他	122
47.	3 次元摩擦攪拌接合 (FSW) 装置と接合支援ソフトウェア	〇谷口正志・大川裕蔵・杉井春夫	122
48.	3 次元摩擦攪拌接合 (FSW) 装置と接合支援ソフトウェア	〇谷口正志・大川裕蔵・杉井春夫	122
49.	3 次元摩擦攪拌接合 (FSW) 装置と接合支援ソフトウェア	○谷口正志・大川裕蔵・杉井春夫	122
50.	三次元駆動による摩擦攪拌接合支援システムの自動化に関する 研究成果	○谷口正志・大川裕蔵・杉井春夫 他	123
51.	次世代の高品位接合技術開発プロジェクト	○谷口正志・大川裕蔵・杉井春夫	123
52.	次世代の高品位接合技術開発プロジェクト	○谷口正志・大川裕蔵・杉井春夫	123
53.	携帯を用いた毒劇物・危険物管理システムの構築と運用結果	○袖岡孝好	123
54.	大阪版トレーサビリティ支援システムの操作について	○竹田裕紀・新田 仁	123
55.	大阪版トレーサビリティシステム利用者講習会	○竹田裕紀・新田 仁	123
56.	最近、安心して食べてます?	○竹田裕紀・新田 仁	123
57.	大阪版農作物トレーサビリティ支援システム指導者研修会	○竹田裕紀・新田 仁	123
58.	大阪版トレーサビリティ支援システムの概要講習会	○竹田裕紀・新田 仁	123
59.	「食の安全・安心」への取り組み	○竹田裕紀・新田 仁	124
60.	5 軸摩擦攪拌接合装置による 3 次元曲面接合	○大川裕蔵・谷口正志・杉井春夫 他	124

2 Development of S-Asis Friction Slir Welding System ○人用浴蔵・谷口正志・杉井春大 124 62 2584に設立車的越え可能な歩行支援器の研究 ○林 忠極・北田青弘・中谷幸太郎 124 63 容易に設立機能の開発 ○林 忠極・北田青弘・中谷幸太郎 124 64 歩行調師可用設塗乗り越えシステム ○林 忠極・北田青弘・中谷幸太郎 124 65 少行補助市用設塗乗り越えシステム ○中谷幸太郎・他 124 66 地行補助市用設塗乗り越えシステム ○中谷幸太郎・他 125 0.適用事例 ○市谷市本市 125 0.適用事例 ○市谷市本市 125 0.週月本学問言によるデザイン分析システム ○中谷幸太郎・林 忠輔・北田貴弘 125 70 歩行補助市のための設定乗り越えシステム ○中谷幸太郎・林 忠輔・北田貴弘 125 71 歩右補動などりなどうなの洗明 126 126 72 メンデナンスフリーを自指した遠応時間観定型 greylisting による ○石島 権 126 73 多品権や地気市でなみてかなした大阪協トレーウビリティン ○新田 仁・竹田裕紀 126 74 文学情報の画像化による特帯雪話向いなるた町高田園を設まる ○不村裕和・山本真問・片菊直子 126 75 大山南貴郎・片菊直子 126 74 文学情報の遺像鹿花子 ○田本朝田・片瀬直子 126 75	61.	5 軸摩擦攪拌接合装置による曲面接合	○大川裕蔵・谷口正志・杉井春夫	124
62. Development of 5-Axis Friction Sur Welding System ○大川溶酸、谷口正志、杉杉春美 124 63. 容易に役差乗り越え(開体の開発 ○朴 忠植・北川貴弘、中谷幸太郎 124 64. 歩行器用段差乗り越え(関体の開発 ○朴 忠植・北川貴弘、中谷幸太郎 124 65. 歩行都助車用段差乗り越え(以の)の第25方法の検討 ○中谷幸太郎 124 67. 両像処理によるデザイン分析システム ○中谷幸太郎 125 67. 両像処理によるデザイン分析システム ○中谷幸太郎 125 67. 両像処理によるデザイン分析システム ○中谷幸太郎 125 70. 歩行補助車用段差乗り越えシステム ○中谷幸太郎 125 70. 歩行補助車用段差乗り越えシステム ○中谷幸太郎 125 70. 歩行補助車用段差乗り越えシステム ○中谷幸太郎 125 71. 携帯情隔準や携帯電話におしるシステム ○中谷幸太郎 125 72. メンテナンスフリー>2 目指した適応即個限定望 greylisting による ○石島 梯・下松物窓 126 度システム, om P2 ○ボイ樹和 126 72. メンデヤシスの開発 ○不白粉和、山本貴朋 ・右 節器 126 73. 多品種の今面の傷化による携帯電話向けるご話情定したする間準備に信システム ○平松初床・石島 俤・他 126 74. 文学情報の両像化による携帯電話向しるに対したする ○年松和、山本貴朋 ・市 126 75. 大阪産産産技会の「肉」と「前に関する間に気になるだう」 ○年松初床・石島 俤・他 126 76. 人体倍常の残壊したるだけの「方」と「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」 ○「本村裕和、山本貴朋 ・「「」」」 77. 「「「「「「「」」」」」」」			他	
63. 容易に段差乗り越え可能な歩行支援器の研究 ○朴 忠極・北川貴弘・中谷幸太郎 124 64. 歩行福田現没差車り越え機構の開発 ○朴 忠極・北川貴弘・中谷幸太郎 124 65. 歩行福田現没差車り越え後様の開発 ○中 忠極・北川貴弘・中谷幸太郎 124 64. 年凶雨像を用いた異常肉(花炎)の判定方法の検討 ○中谷幸太郎 125 65. 密信処理技術の演算気用への可能性 -デザインの嗜好分析へ ○中谷幸太郎 125 0週期事例- ○中谷幸太郎・林 忠植・北川貴弘 125 0週期事件 ○中谷幸太郎・札 124 65. 歩行補助車のための設差乗り越えシステム ○中谷幸太郎・札 ○中谷幸太郎・札 125 70. 歩行補助車のための設差乗り越えシステム ○中谷幸太郎・木 126 71. 携帯情報端未代携帯電話における多言語利用 ○石島 第 平松初味 126 72. メンテナンスソフ・シーを目上した逸に時間限定型greytisting による ○石島 第 平松初味 126 73. 多品種少量の歳後年による汚ちしれ、更新に関する問題解決と新ネット ○平松初珠・石島 館・伸止秀和 126 74. 文学情報の面像化による携帯電電局い多言語情報起信システム ○平松初珠・石島 館・伸止秀和 126 75. 大阪商産技術にある方内 LAN 更新に関する問題導法と新ネット ○平松初珠・石島 館・伸止秀和 126 76. 人体価帯部の接触正と約消したる前方目上へ窓底にあただけ ○木村裕和・山木貴則・片相真子 126 77. 和劇坊: びはweedasticity of Human Skin for Prevention of Pressure ○本村裕和・山木貴則・片相真子 126 79. Aalysis of Viscoedasticity of Human Skin for Prevention of Pressure ○中崎藤勝・津田和娘・他 127 <tr< td=""><td>62.</td><td>Development of 5-Axis Friction Stir Welding System</td><td>○大川裕蔵・谷口正志・杉井春夫 他</td><td>124</td></tr<>	62.	Development of 5-Axis Friction Stir Welding System	○大川裕蔵・谷口正志・杉井春夫 他	124
94 ・少行器用段差渠も超え幾柔も超えくステム ・の朴 忠純・北川貴弘・中谷幸太郎 ・124 ・小川貴温・中谷幸太郎 ・124 ・中谷幸太郎・他 ・124 ・中谷幸太郎・他 ・124 ・中谷幸太郎・他 ・124 ・中谷幸太郎・他 ・125 ・中谷幸太郎・他 ・125 ・中谷幸太郎・他 ・125 ・中谷幸太郎・他 ・125 ・中谷幸太郎・他 ・125 ・中谷幸太郎・他 ・125 ・中谷幸太郎・ ・125 ・中谷幸太郎 ・中谷幸太郎 ・ロ・日本 ・中谷寺太郎 ・ロ・日本 ・ロ・ ・ロ・日本 ・ロ・ロ ・ロ・	63.	容易に段差乗り越え可能な歩行支援器の研究	○朴 忠植・北川貴弘・中谷幸太郎	124
55. 歩行補助車用段差乗り越えシステム ○朴 忠極・北川貴弘,中谷幸太郎 124 66. 牛肉画像を用いた異常肉(節炎)の判定方法の磁対 ○中谷零太郎・他 124 71. 画像処理によるデザイン分析システム ○中谷零太郎・他 125 の適用事例 ○中谷零太郎・木 忠輔・北川貴弘 125 の適用事例 ○中谷零太郎・木 忠輔・北川貴弘 125 の適用事例 ○中谷零太郎・木 忠輔・北川貴弘 125 の適用事例 ○中谷零太郎・木 忠輔・北川貴弘 125 少方村補助車のための段差乗り越えシステム ○中谷零太郎・木 忠輔・北川貴弘 125 ジャデ村補助車のための段差乗り越えシステム ○中谷率太郎・木 忠輔・北川貴弘 125 ジャデ材補助車のための段差乗り越えシステム ○中谷率太郎・木 忠輔・北川貴弘 125 ジャデオンスフリーを目指した適応時間限定型 greytisting による ○石島 第・平松初床 126 渡惑メール対策とその効果 ○手松初珠・石島 第・他 126 ブメンテナンスフリーを目指した適応時間限定営システム ○平松初珠・石島 第・他 126 ワークの評価 ○ ○本村希和・山本貴則・片捕真子 126 アークロアークの評価 ○ ○本村希和・山本貴則・片捕真子 126 アークの評価 ○ ○本村希和・山本貴則・片捕真子 126 アレロスログ以会情範囲に塗んで耐したっ下気に広るだけ」 ○本村希和・山本貴則・片捕真子 126 アレロマの評価 ○本村希和・山本貴則・片捕真子 127 シームの指数の「住部価誌愛話などシステムを製品にしたっ転 ○中崎隆勝・津田和娘・他 1 記録金が目標を搭載した言新段	64.	歩行器用段差乗り越え機構の開発	○朴 忠植・北川貴弘・中谷幸太郎	124
66 牛肉爾像老用いた異常肉(筋炎)の判定方法の検討 中古谷孝太郎・他 124 76 阿像処理によるデザイン分析システム 中古谷孝太郎・他 125 87 阿像処理技術の産業は用への可能性 ーデザインの嗜好分析へ ○中谷孝太郎・朴 忠福・北川貴弘 125 98 阿像処理技術の産業は用への可能性 ーデザインの嗜好分析へ ○中谷孝太郎・朴 忠福・北川貴弘 125 98 伊福助車肉足差乗り越えシステム ○中谷孝太郎・朴 忠福・北川貴弘 125 70 少行補助車のための段差乗り越えシステム ○中谷孝太郎・朴 忠福・北川貴弘 125 71 携帯情報編末や帳帯電話における多言語利用 ○石島 第 125 72 メンテナンスフリーを目指した適応時間限定型 greyIsting による ○石島 第 平松初珠 126 72 メンテオンの開発 ○年松初珠・石島 第・他 126 74 文字情報の面面像化による携帯電話向け多言語情報配信システム ○甲松初珠・石島 第・他 126 74 文字情報の面像化による携帯電話向け多言語情報配信システム ○甲松初珠・石島 第・他 126 75 大阪府産技研にある方内 LAN 更新に関する問題解決と新ネット ○甲松初珠・石島 第・中社秀和 126 76 人体小骨部の接触性と組織血流量にとんぼすマットレスの影響 ○本村裕和・山本貴則・片相真子 126 77 Majsis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ucers 木村裕和・○他 127 78 Majsis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ucers	65.	歩行補助車用段差乗り越えシステム	○朴 忠植・北川貴弘・中谷幸太郎	124
67. 画像処理によるデザイン分析システム 中谷幸太郎 125 68. 画像処理技術の産業応用への可能性: ーデザインの嗜好分析への市谷業太郎 125 0. 歩行補助車のための役差乗り越えシステム 中谷辛太郎・朴 忠植・北川貴弘 125 70. 歩行補助車のための役差乗り越えシステム 中谷辛太郎・朴 忠植・北川貴弘 125 71. 携帯情報端未や携帯電話における多言語利用 ○中谷辛太郎・朴 忠植・北川貴弘 125 72. メンテナンスフリーを目用した適応時期限定型 greylising による ○市品 単 126 速感メール対策とその効果 ○石島 単・平松初珠 126 72. メンテナンスフリーを目用した適応時期限定型 greylising による ○市品 単・平松初珠 126 速速メール対策とその効果 ○新田 仁・竹田裕紀 126 73. 多品権少量の農作物生たる携帯電話向け多言語情相配信システム ○平松初珠・石島 悌・他 126 一伯俗和国の個体による携帯電話向け多言語情報配信システム ○平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 74. 文字情報の画像化による携帯電話向け多言語情報配信システム ○平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 74. 大家情報用の両権性による携帯電話向け多言語情報記信システム ○平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 75. 大阪協権投催や意気行ちたちま気部した大阪園を従家 ○平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 76. 人体伯舎部の接触上と組織血流量に及ぼすマットレンの影響 ○木村裕和・山本貴問・片相真子 126 77. 御旅寺術約2具類の作能評価 ○木村裕和・山本貴問・片相真子 126 78. 敏能影的でりをscatifie ○木村裕和・〇他 127 79. Audysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 79. Suth代振動気をすいたがあるだまびシステム	66.	牛肉画像を用いた異常肉(筋炎)の判定方法の検討	○中谷幸太郎・他	124
68 両優処理技術の産業応用への可能性 ーデザインの嗜好分析へ ○中谷幸太郎・朴 忠植・北川貴弘 125 0 夢行補助車用設美り越えシステム ○中谷幸太郎・朴 忠植・北川貴弘 125 1 携帯情報端未や携帯電話における多言語利用 ○石島 第 125 2 メンテナンスフリーを目指した通応時間限定型greyfistingによる ○石島 第 125 2 メンテナンスフリーを目指した通応応した大阪散トレーサビリティ支 ○新田 C・竹田裕紀 126 提返ステムの開発 ○ 第 第 126 ガンテナンスフリーを目指した通応した大阪散トレーサビリティ支 ○新田 C・竹田裕紀 126 ガンデナンスフリーを目指した通応した大阪散トレーサビリティ支 ○新田 C・竹田裕紀 126 ブンデ情報の画像化による携行電話向け多言語情報転信システム ○平松初珠・石島 第・中辻秀和 126 ウークの評価 7 人体価容部の接触圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 ○半松初珠・石島 第・中辻秀和 126 アレクの評価 7 秋点踏村・山本貴則・片桐真子 126 7 横点雪が取りた製師に見るた話した「トレーサビスの影響 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 7 横点低街マ人物業電話からなした」 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 <td< td=""><td>67.</td><td>画像処理によるデザイン分析システム</td><td>○中谷幸太郎</td><td>125</td></td<>	67.	画像処理によるデザイン分析システム	○中谷幸太郎	125
69 歩行補助車のための段差乗り越えシステム ○中谷幸太郎・朴 忠植・北川貴弘 125 70 歩行補助車のための段差乗り越えシステム ○中谷幸太郎・朴 忠植・北川貴弘 125 71 携帯情報端未や桃帯電話における多言語利用 ○石島 第 125 72 メンテナンスフリーを目指した適応時間限定型 greylising による ○石島 第・平松初珠 126 速惑メール対策とその効果 ○石島 第・平松初珠 126 73 多品種少量の農作物生産に対応した大阪阪トレーサビリティ支 ○新田 仁・竹田裕紀 126 一在留外国人向け災害情報提供に関する提案 ○平松初珠・石島 梯・他 126 一方面分点人向市災害情報提供に関する問題解決と新ネット ○平松初珠・石島 梯・申辻秀和 126 ワークの評価 ○中公都本・石島 梯・申辻秀和 126 75 大阪商売技術にある庁内 LAN 更新に関する問題解決と新ネット ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 126 76 人体仙骨部の接触圧と組織血流量に反活る問題振動法と気活すマットレスの影響 ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 126 77 締在影内望人体帯電防止シート「底に貼るだけ」 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 78 縦広路付型人体帯電防止シート「底に貼るだけ」 ○木村裕和・山本貴則・上桐真子 127 79 Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和 ○他 127 71 就業年の自動勇生側、総長福祉設まるびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 72 文次世代振動耐人性評価試験設まるびシステム ○中嶋隆勝・注田和城・他 127 73 次世代振動耐人性評価試験支表がシステムを刻見んしまた	68.	画像処理技術の産業応用への可能性 ーデザインの嗜好分析への適用事例-	○中谷幸太郎	125
70. 歩行補助車のための段差乗り越えシステム ○中谷幸太郎・朴 忠植・北川貴弘 125 71. 携帯情報端末や携帯電話における多言語利用 ○石島 悌 125 72. メンテナンスフリーを目指した適応時間限定型 greylisting による ご石島 悌・平松初珠 126 速惑メール対策とその効果 ○新田 仁・竹田裕紀 126 73. 多品種少量の農作物生産に対応した大阪阪トレーサビリティ支 ○新田 仁・竹田裕紀 126 ガンテオンの明発 ○平松初珠・石島 悌・他 126 74. 文字情報の画像化による携帯電話向け多言語情報配信システム ○平松初珠・石島 悌・他 126 一在留外国人向け災害情報提供に関する撮塞へ ○平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 75. 大阪府産投研にみる广内 LAN 更新に関する問題解決と新ネット ○平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 76. 人体仙骨部の接触圧と組織血液量に及ぼすマットレスの影響 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 77. 褥瘡予防寝具類の性能評価 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 78. 歌に貼付型人体帯電防止シート「底に貼るだけ」 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 79. Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 79. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 74. 実験化会社離社会社報した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 75. 大鹿敷動耐気とはまるシステムと変えたるちスイント ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 76. 人体代振動耐人性評価試験装置およびシステムを製品化しましたー 128 ○小本貴期・木村裕和・他 128 77. 大田代振動耐人性評価試験装置もシュム気気な気を塗ま用したしれ貴郎 ○中嶋隆勝・津田和城・他	69.	歩行補助車用段差乗り越えシステム	○中谷幸太郎・朴 忠植・北川貴弘	125
7.1.携帯情報端未や携帯電話における多言語利用 ○石島 悌 125 7.2.メンテナンスフリーを目指した適応時間限定型 grylisting による 速感メール対策とその効果 ○石島 悌・平松初珠 126 第2<メンテナンスフリーを目指した適応時間限定型 grylisting による 速感メール対策とその効果 ○新田 仁・竹田裕紀 126 7.3.多品種少量の農作物生産に対応した大阪版トレーサビリティ支 ●新田 仁・竹田裕紀 126 塩システムの開発 ○平松初珠・石島 悌・他 126 7.4.文字情報の画像化による携帯電話向け多言語情報処信システム ○平松初珠・石島 悌・他 126 一在留外国人向け災害情報提供に関する問題解決と新ネット ワークの評価 ○平松初珠・石島 悌・申辻秀和 126 7.5.大阪府産技研にみる庁内 LAN 更新に関する問題解決と新ネット ワークの評価 ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 126 7.6.人体仙骨部の技働生と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 126 7.7.勝瘡子防寝具類の性能評価 ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 126 7.8. 検査防容見類如の性能評価 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 7.9. Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ucers 木村裕和・○他 127 8.0. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 7.1. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 7.2. 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステムを製品化しましたー 127 7.4. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システムを製品化しましたー ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 7.9. 次世代振動耐久生評価 ○中嶋隆勝・津田和城・他 128 次世代振動耐人と補動間表置、システムを製品 ○山本貴	70.	歩行補助車のための段差乗り越えシステム	○中谷幸太郎・朴 忠植・北川貴弘	125
72. メンデナンスフリーを目指した適応時間限定型 greylisting による ○石島 悌・平松初珠 126 迷惑メール対策とその効果 ○新田 仁・竹田裕紀 126 浅システムの開発 ○平松初珠・石島 悌・他 126 イン学情報の画像化による携帯電話向け多言語情報配信システム ○平松初珠・石島 悌・他 126 っ在留外国人向け災害情報提供に関する問題解決と新ネット ○平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 フークの評価 ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 126 76. 人体仙背部の接触圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 126 77. 帰奈予防寝具類の性能評価 ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 126 78. 靴底貼付型人体常電防止シート「底に貼るだけ」 ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 126 79. Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 80. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋陰勝・津田和城・他 127 75. 大度商麦加酸人体評価装置もよびシステム ○中嶋陰勝・津田和城・他 127 76. 人体電動配入位非価装置・システムを製品化しました ○中嶋陰勝・津田和城・他 127 75. 大比電動配入位非価装置もよびシステム ○中嶋陰勝・津田和城・他 127 76. 人体電振動配入位非運動装置もよびシステム ○中嶋陰勝・津田和城・他 127 77. 大社希知高大陸市 ○山本貴則 128 ○女北代振動動大和希和・告 128 76. 人によるケンダム振動式、たるるた用まで ○山本貴則 128 ○山本貴則	71.	携帯情報端末や携帯電話における多言語利用	○石島 悌	125
23. 多品種少量の農作物生産に対応した大阪版トレーサビリティ支 新田 仁・竹田裕紀 126 73. 多品種少量の農作物生産に対応した大阪版トレーサビリティ支 新田 仁・竹田裕紀 126 現システムの開発 (平松初珠・石島 悌・他 126 74. 文字情報の画像化による携帯電話向け多言語情報配信システム (平松初珠・石島 悌・仲辻秀和 126 75. 大阪府産技師にみる庁内 LAN 更新に関する問題解決と新ネット (平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 76. 人体仙骨部の残蝕圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 (小村裕和・山本貴則・片桐真子 126 77. 褥瘡予防寝具類の性能評価 (小村裕和・山本貴則・片桐真子 126 78. 就底貼付型人体常電防止シート「底に貼るだけ」 (小村裕和・山本貴則・片桐真子 126 79. Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・〇他 127 81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム (中嶋隆勝・津田和城・他 127 82. 次世代振動耐人生評価試験装置およびシステム (中嶋隆勝・津田和城・他 127 73. 次世代振動耐人生評価装置もよびシステム (中嶋隆勝・津田和城・他 127 74. 広おうる大分移動モデルとその実体環微鏡的観察 (中嶋隆勝・津田和城・他 127 75. 友膚素面温湿度種手を詰まるタオルの快適感評価 (山本貴則・木村裕和・「細 128 76. 大社参助部大分谷動モデルとその実体環微鏡的観察 (山本貴則・木村裕和・他 128 75. 女膚素面温湿度種「たちはる大分移動モデルとその実体微鏡的観察 (山本貴則・木村裕和・片相美 128 76. 大社教諭着を用いた褥を予防寝具の性能評価 (山本貴則・木村裕和・片相美 128 76. 本はたるた	72.	メンテナンスフリーを目指した適応時間限定型 greylisting による 迷惑メール対策とその効果	○石島 悌・平松初珠	126
2 50 (日本) 2 (15) (15) (15) (15) (15) (15) (15) (15)	73	多品種小量の豊作物生産に対応した大阪版トレーサビリティ支	○新田 仁・竹田裕紀	126
24 文字情報の画像化による携帯電話向け多言語情報配信システム -在留外国人向け災害情報提供に関する提案一 126 75 大阪府産技研にみる庁内 LAN 更新に関する問題解決と新ネット ワークの評価 ○平松初珠・石島 悌・他 126 76 人体仙骨部の接触圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 ○木村裕和・山本貴則・片桐貞子 126 77 療着予防寝具類の性能評価 ○木村裕和・山本貴則・片桐貞子 126 78 靴底貼付望人体帯電防止シート「底に貼るだけ」 ○木村裕和・山本貴則・片桐貞子 126 79 Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers ○木村裕和・〇他 127 80 Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・〇他 127 81 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 72 次世代振動耐久性評価装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 73 次世代振動耐久性評価装置なびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 74 大協支動気(たまるラネルの大道徳京都観) 0 中嶋隆勝 75 大広表の支払振動試験 0 中嶋隆勝 127 75 大山大長利の大陸編装置 システムを受大人観会 0 中嶋隆勝 127 75 大山本長司 27 0 中嶋隆勝 128 7 振動試験の基礎から応用まで 27 <td>70.</td> <td>第システムの開発</td> <td></td> <td>120</td>	70.	第システムの開発		120
一在留外国人向け災害情報提供に関する提案- ○中松初珠・石島 梯・中辻秀和 75. 大阪府産技研にみる庁内 LAN 更新に関する問題解決と新ネット ○平松初珠・石島 梯・中辻秀和 ワークの評価 ○本村裕和・山本貴則・片桐真子 76. 人体仙骨部の接触圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 77. 褥瘡予防寝具類の性能評価 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 78. 軟底貼付型人体帯電防止シート「底に貼るだけ」 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 79. Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers ○木村裕和・〇他 80. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・〇他 81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 27. 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 28. 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステム ○中嶋隆勝 84. 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 27. 大世代振動耐久性評価装置などシステムを製品化しました- 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感覚疲惫 田中敷小村裕和 93. 音響解析による右耳・左耳の聴力感覚症 四 94. 市場正動力感覚症、一他 129	74	文字情報の画像化による携帯電話向け多言語情報配信システム	○平松初珠・石島 悌・他	126
1267 大阪府産技研にみる庁内LAN更新に関する問題解決と新ネット ワークの評価 ○平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 75. 大阪府産技研にみる庁内LAN更新に関する問題解決と新ネット ワークの評価 ○平松初珠・石島 悌・中辻秀和 126 76. 人体仙骨部の接触圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 76. 大体仙骨部の接触圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 77. 褥瘡予防寝具類の性能評価 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 78. 就飯貼付型人体帯電防止シート「底に貼るだけ」 ○木村裕和・一他 127 79. Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・一他 127 80. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・一他 127 81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 72. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 73. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム ○中嶋隆勝 127 74. 振動読数の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 127 75. 友膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○中嶋隆勝 127 74. 振動読録的気能力を加た満着が防寝見の ○山本貴則・木村裕和・他 128 75. 友膚表面温度解析手法によるタオルの快適感素動法による多配向 □山本貴則・木村裕和・片相真子	,	- 右昭外国人向け災害情報提供に関する提案-		120
マークの評価 マークの評価 126 125 126 125 76 人体仙骨部の接触圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 77 褥瘡予防寝具類の性能評価 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 78 靴底貼付型人体帯電防止シート「底に貼るだけ」 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 79 Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers ヘ木村裕和・〇他 127 80 Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・〇他 127 81 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 82 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 9.ムはよるランダム振動試験) 84 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 9.ムによるランダム振動試験) 84 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 127 9.ムによるうンダム振動試験) 84 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 128 84 振動試験の基礎をから応用まで ○山本貴則 ○中嶋隆勝 128 85 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価疑節的観察 ○山本貴則・木村裕和・他 128 86 タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・他 128 87 前期高齢被験者を用いた海瘡予防寝具の性能評価 □山本貴則・木村裕和・ 128 88<	75.	大阪府産技研にみる庁内LAN 更新に関する問題解決と新ネット	○平松初珠・石島 悌・中辻秀和	126
76. 人体仙骨部の接触圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 77. 褥瘡予防寝貝類の性能評価 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 78. 大体常電防止シート「底に貼るだけ」 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 79. Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers ○木村裕和・○他 127 80. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 82. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 93. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム(蓄積疲労スペクト ○中嶋隆勝 127 94. 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 128 95. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則・木村裕和・他 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝貝の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 91. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 <t< td=""><td>,</td><td>ワークの評価</td><td></td><td>120</td></t<>	,	ワークの評価		120
11.11 11.11	76	人体仙骨部の接触圧と組織血流量に及ぼすマットレスの影響	○木村裕和・山木貴則・片桐直子	126
77. 褥瘡予防寝具類の性能評価 ○木村裕和・山本貴則・片桐真子 126 78. 靴底貼付型人体帯電防止シート「底に貼るだけ」 ○木村裕和 127 79. Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 80. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 82. 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 83. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム(蓄積疲労スペクト) ○中嶋隆勝 127 94. 振動試験の基礎から応用まで 一次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 0中嶋隆勝 128 95. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則 128 96. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・他 128 97. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 98. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 99. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 91. カーボンナノコイルの電気泳動法による電向気 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度強化しよステムの開発 □牛帽座一郎・野坂俊紀・○他 129 93. 音響解析による其販人気気(1) ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	/0.		他	120
 1. 前加子的之父似で中面前面面。 1. 前加子的之父似で中面前面面。 1. 前加子的之父似で中面前面面。 1. 前加子的之父似で中面面面。 1. 前前子的之父似で中面面面。 1. 前前子的之父似で中面。 1. 前前子的之父似で中面。 1. 前前子的之父似で中面。 1. 前前子的之父似下中面。 1. 前前音節被驗着を用いた褥瘡子的寝具の性能評価 1. 小ボンナノコイルの誘電泳動法による配向 1. 日中健一郎、野坂俊紀・○他 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1	77.	褥瘡予防寝具類の性能評価	○木村裕和・山本貴則・片桐真子	126
1 Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers 127 27 Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 80. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 82. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 83. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム(蓄積疲労スペクト ラムによるランダム振動試験) ○中嶋隆勝 127 84. 振動試験の基礎から応用まで 一次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- ○中嶋隆勝 128 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則・木村裕和・牛相見 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 盲響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	78.	靴底貼付型人体帯電防止シート「底に貼るだけ」		127
Ulcers 127 80. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 82. 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 83. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 84. 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 128 -次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 0中嶋隆勝 128 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則・木村裕和・他 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 盲響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・津明靖子 129	79.	Analysis of Viscoelasticity of Human Skin for Prevention of Pressure	木村裕和・○他	127
80. Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers 木村裕和・○他 127 81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 82. 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 83. 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 84. 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 127 94. 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 127 95. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則 128 94. ケオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 128 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 129 91. カーボンナノコイルの電気泳動法による垂直配向 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129		Ulcers		
81. 試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 82. 次世代振動耐久性評価装覧およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 83. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム(蓄積疲労スペクト) ○中嶋隆勝 127 ラムによるランダム振動試験) 0 ○中嶋隆勝 127 84. 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 127 ッ次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 0 ○中嶋隆勝 128 -次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 0 山本貴則 128 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則・木村裕和・他 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・小桐真子 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 91. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	80.	Simulation of Stress Distribution for Prevention of Pressure Ulcers	木村裕和・○他	127
21. 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステム ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 22. 次世代振動耐久性評価試験装置およびシステム(蓄積疲労スペクト) ○中嶋隆勝・津田和城・他 127 33. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム(蓄積疲労スペクト) ○中嶋隆勝 127 ラムによるランダム振動試験) 84. 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 128 84. 振動試験の基礎から応用まで ○中嶋隆勝 128 -次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則 128 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則・木村裕和・他 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 91. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	81	試験条件の自動導出機能を搭載した高精度振動試験システム	○中嶋降勝•津田和城•他	127
 3. 次世代振動耐久性評価装置およびシステム(蓄積疲労スペクト うムによるランダム振動試験) 4. 振動試験の基礎から応用まで 一次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 5. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 3. 次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 5. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 3. 小ボンけるか分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 3. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 3. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 4. 品中健一郎・野坂俊紀・○他 4. 加本党中述のでの読電泳動法による配向技術の開発 4. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向技術の開発 4. カーボンナノコイルの誘電泳動法による重直配向 4. カーボンチノコイルの誘電泳動法による重直配向 4. カーボンナノコイルの誘電泳動法による重直配向 4. カーボンナノコイルの誘電泳動法による重直配向 4. カーボンナノコイルの誘電泳動法による重直配向 4. カーボンナノコイルの誘電泳動法による重直配向 4. カーボンナノコイルの誘電泳動法による重直配向 4. カーボンナノコイルの誘電泳動法による 4. カーボンナノコイルの 4. カーボンナノコイルの影響 (1. カーボンホーム) 4. カーボンナノコイルの 4. カーボンナノコイルの 4. カーボンホーム) 4. カーボンホーム 4. カーボンナノコイルの 4. カーボンホーム 4. カーボンホーム 4. カーボンホーム <!--</td--><td>82</td><td>次世代振動耐久性評価試験装置おとびシステム</td><td>○ 中嶋隆勝 · 津田和城 · 他</td><td>127</td>	82	次世代振動耐久性評価試験装置おとびシステム	○ 中嶋隆勝 · 津田和城 · 他	127
3.1. (人民任)(社会)(副人民任)(副会社(および)) (○中嶋隆)(国人民)) 127 ラムによるランダム振動試験) 128 84. 振動試験の基礎から応用まで -次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 128 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・他 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 田中健一郎・野坂俊紀・○他 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	83	次世代振動耐久性評価は狭夜直408002パノム		127
84. 振動試験の基礎から応用まで -次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 128 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・他 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 128 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 128 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 129 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による垂直配向 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	05.	うしたよろうンダし振動試験)		127
一次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 128 -次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました- 128 85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 □山本貴則 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 □山本貴則・木村裕和・他 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 □山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による垂直配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	84	振動試験の基礎から応用すで	○中嶋降勝	128
85. 皮膚表面温度解析手法によるタオルの快適感評価 ○山本貴則 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・他 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 田中健一郎・野坂俊紀・○他 128 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による垂直配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	01.	- 次世代振動耐久性評価装置・システムを製品化しました-		120
80. 反肩衣面面反角折手法によるマスケルの() 128 86. タオルにおける水分移動モデルとその実体顕微鏡的観察 ○山本貴則・木村裕和・他 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 ○山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 128 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 128 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 129 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による垂直配向 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	85	内 唐 美 両 沮 庐 解析 毛 注 に ト ス タ オ 山 の 仲	○山木豊則	128
80. メイルにおりるホカ移動でナルとての実体顕微顕的観察 〇山本貨肉・木村裕和・片桐真子 128 87. 前期高齢被験者を用いた褥瘡予防寝具の性能評価 〇山本貴則・木村裕和・片桐真子 128 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 128 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 128 91. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 〇片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 〇君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	86	及肩衣面温及肝切子仏による > 4 ルの氏過念計画 タオルにおける水分移動エデルとその実体顕微鏡的組刻	○山本員則 ○山本書則・木材於和・仲	120
 87. 前期高邮被驶着を用いた褥着 P防装具の住能評価 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による垂直配向 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 94. つ君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 128 129 120 120 121 <l< td=""><td>80. 87</td><td>六イルにものる小刀 物動 こうル ここの 天体頭 (城 現 り 戦 示</td><td></td><td>120</td></l<>	80. 87	六イルにものる小刀 物動 こうル ここの 天体頭 (城 現 り 戦 示		120
 88. カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による重直配向 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 94. ロー健一郎・野坂俊紀・○他 95. 音響解析による共振現象検出システムの開発 	07.	前期局m1枚駛石を用いた階 <u>偏</u> 丁的浸具の注胞計価	〇山本員則・不利俗和・月柄具丁 他	120
 89. Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis 90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による垂直配向 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 94. 日中健一郎・野坂俊紀・○他 95. 自響解析による共振現象検出システムの開発 	88.	カーボンナノコイルの誘電泳動法による配向	田中健一郎・野坂俊紀・〇他	128
90. カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による垂直配向 田中健一郎・野坂俊紀・○他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	89.	Alignment of Carbon Nano-Coils Using Dielectrophoreis	田中健一郎・野坂俊紀・〇他	128
91. カーボンナノコイルの誘電泳動法による垂直配向 田中健一郎・野坂俊紀・〇他 129 92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	90.	カーボンナノコイルの電気泳動法による配向技術の開発	田中健一郎・野坂俊紀・〇他	129
92. 年齢による右耳・左耳の聴力感度変化 ○片桐真子・山本貴則・木村裕和 129 08. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	91.	カーボンナノコイルの誘電泳動法による垂直配向	田中健一郎・野坂俊紀・〇他	129
93. 音響解析による共振現象検出システムの開発 ○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子 129	92.	年齢による右耳・左耳の聴力感度変化	○片桐真子・山本貴則・木村裕和 他	129
	93.	音響解析による共振現象検出システムの開発	○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子	129

-段ボール包装貨物への適用-

94.	音響解析による共振現象検出システムの開発 	○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子	129
95.	ガタを有する被包装物の振動に関する数値的および理論的検討	○津田和城・中嶋隆勝	130
96.	貨物で見られるガタと被包装物の振動に関する実験的検討	○津田和城・中嶋降勝・他	130
97.	ガタを有する被包装物の振動に関する実験的検討	○津田和城・中嶋降勝・他	130
98.	ガタ振動をともなう包装品の振動耐久性に関する検討	○津田和城・中嶋降勝・他	130
99.	反応性スパッタ法による TaAl-N 薄膜における高 TCR 化への検	岡本昭夫・〇他	130
	討		
100.	高分子・プラスチック基板のガスバリア性評価方法の開発	○岡本昭夫・松永 崇	131
101.	微細加工技術による光・マイクロデバイスの開発	○井上幸二	131
102.	微細加工を用いた光・マイクロデバイスの開発	○井上幸二	131
103.	2 段階成長およびポストアニール処理を用いた CuScO ₂ 薄膜のエ ピタキシャル成長	○筧 芳治・佐藤和郎	131
104.	高分子フィルム上への酸化クロム薄膜ストレインゲージの作製	○筧 芳治・佐藤和郎・岡本昭夫	131
	と触覚センサへの応用	松永 崇・小栗泰造・山元和彦	
		日下忠興・吉竹正明	
105.	酸素ラジカル照射により作製された CuScO _{2+x} (0001) エピタキ シャル薄膜の特性	○ 第 浩・佐藤和郎	131
106.	Electrical and Optical Properties of Excess Oxygen Intercalated	○筧 芳治・佐藤和郎・四谷 任	131
	CuScO ₂ (0001) Epitaxial Films Prepared by Oxygen Radical Annealing	他	
107.	RF マグネトロンスパッタ法による Zn ₂ SnO ₄ の成膜 (III)	○佐藤和郎・筧 芳治・森脇耕介	132
		村上修一・岡本昭夫	
108.	Electrical and Optical Properties of Al-Doped ZnO-SnO ₂ Thin Films	○佐藤和郎・筧 芳治・岡本昭夫	132
	Deposited by RF Magnetron Sputtering	村上修一・森脇耕介・四谷 任	
109.	MEMS 技術を使った超音波マイクロアレイセンサの開発	○田中恒久・井上幸二・他	132
110.	ドライエッチングを用いたマイクロ超音波センサの作製	○田中恒久・井上幸二・他	132
111.	MEMS 技術を使った誘電ボロメータ型赤外線センサの開発	○村上修一・宇野真由美・井上幸二	132
		他	
112.	Development of Photosensitive Insulating Materials as a Planarization and Passivation Layer on TFT LCDs	村上修一・〇他	133
113.	シルセスキオキサン系ゲート絶縁膜の作製と FET 特性	村上修一・〇他	133
114.	赤外線アレイセンサの作製プロセス	○村上修一	133
115.	Novel Positive Type Photosensitive Insulating Materials by Organic/ Inorganic Hybrid Technologies as a Passivation Layer on TFT LCDs	村上修一・〇他	133
116.	シルセスキオキサン系ゲート絶縁膜の開発と TFT 特性評価	村上修一・〇他	133
117.	Preparation of Ba(Ti,Zr)O ₃ Ferroelectric Thin Films for Infrared	○村上修一・宇野真由美・佐藤和郎	134
	Detection by Metal-Organic Decomposition	他	
118.	ポリプロピレン上への DLC 薄膜の形成	○松永 崇・岡本昭夫・他	134
119.	高分子フィルム上への酸化クロム 薄膜ストレインゲージの作製	○松永 崇・筧 芳治・岡本昭夫	134
	と触覚センサへの応用	佐藤和郎・小栗泰造・山元和彦	
		日下忠興・吉竹正明	
120.	酸化クロム薄膜ストレインゲージを利用した触覚センサの試作	○松永 崇・筧 芳治・岡本昭夫	134
		日下忠興・佐藤和郎・小栗泰造	
		山元和彦・吉竹正明	
121.	MEMS 技術を用いた有機単結晶の熱伝導率測定デバイス	○宇野真由美・他	134

122.	プラズマスパッタ法により作製した Pt-C 複合薄膜の電極触媒へ	○松本茂生・西村 崇・岡本昭夫	134
102		野垣你幻, 〇仰	125
125.	カーホンノノコイル複口向俄能コンハリントの用光 十匹広地域 COE 東娄「ナノカーギン洋田技術の創成」の広田畑		133
124.	大阪府地域 COE 事業「ノノカーホノ活用投制の制成」の成米税 要	○到奴陵祀	155
125.	種々の環境下での自己温度調節面状ヒーターの特質	広畑 健・○他	135
126.	自己温度調節ヒーターの比較	広畑 健・○他	135
127.	スチレンブロックコポリマーグラフト物の分子量評価	○山元和彦	135
128.	スチレンーイソプレンブロックコポリマー (SIS) へのアクリル酸 エステルの乳化グラフト重合	○山元和彦・舘 秀樹	135
129.	接着不良の解析手法	○木本正樹	135
130.	マクロアゾ重合開始剤を用いて合成したコアーシェル型微粒子	○木本正樹・日置亜也子	136
	の特性と複合化		
131.	アクリルシリコーン/シリカ・ナノ複合材料の撥水性におよぼ	○木本正樹・日置亜也子・他	136
	す調製時における水の添加量の影響		
132.	ナノ複合微粒子を用いた機能性材料の開発	○木本正樹	136
133.	有機無機複合微粒子の調製と機能性材料への展開	○木本正樹	136
134.	プレコート鋼板塗膜の摩擦摩耗試験	○木本正樹・出水 敬・他	136
135.	一回の重合による凹凸型単分散ゲル微粒子の調製とその特性	○木本正樹・日置亜也子	137
136.	一回の重合による凹凸型単分散ゲル微粒子の調製とその特性	○ 小本正樹・日間亜也子	137
137.	途装鋼板塗膜の摩擦摩耗特性	○ 木本正樹・出水 敬・他	137
138.	電着塗装用高分子微粒子の開発	○浅尾勝哉	137
139.	沈殿重合法によるポリイミド微粒子の調製と形態制御	○浅尾勝哉・山元和彦・吉岡弥生	137
		舘 秀樹・他	
140.	ポリイミド微粒子の開発と応用	○浅尾勝哉・山元和彦・吉岡弥生	138
		舘 秀樹	
141.	ポリイミド微粒子の開発と応用	○浅尾勝哉	138
142.	ポリイミド微粒子の開発と応用展開	○浅尾勝哉	138
143.	ポリイミド微粒子の開発と応用	○浅尾勝哉	138
144.	ポリイミド微粒子の調製と粒子径制御	○浅尾勝哉・山元和彦・吉岡弥生舘 秀樹	138
145.	化学気相反応による炭化シリコン多孔質体の作製	垣辻 篤・〇他	138
146.	SiC ナノファイバーの気相成長における触媒効果	垣辻 篤・〇他	138
147.	光応答性マラカイトグリーン界面活性剤によるベシクル形成の	櫻井芳昭・○他	139
	促進と薬剤分離の光制御		
148.	Separation of Metallic and Semiconducting Single-Walled Carbon	櫻井芳昭・○他	139
140	Nanotubes by Electric Field 成业性はなな物面とつル合物の合式と光化学的発動	○欄井茎四,井上四十郎	120
149.	感元性基で複数値もつ化合物の合成と元化子的争動 来広 ダフニカノトガル ン田西浜州和にトスズシカル形式の米	○ 桜井万昭・井上陽太郎	139
150.	元心谷マラカイトクリーン界面活性剤によるハシクル形成の元 制御	桜升方昭・○他	139
151.	カーボンナノコイル先端触媒粒子の透過電子顕微鏡 (TEM) 観察	○久米秀樹・西川義人・野坂俊紀 他	139
152.	Synthesis of Super Long Vertically Aligned Brush Like Carbon	久米秀樹・○他	140
	Nanotubes with Controlled Number of Walls		
153.	Synthesis of Super Long Vertically Aligned Brush Like Carbon	久米秀樹・○他	140
	Nanotubes with Controlled Number of Walls		

154.	カーボンナノコイルの成長のための触媒活性	久米秀樹・○他	140
155.	アミノ基を有する芳香族ポリアミド微粒子の創製および表面修	○吉岡弥生・浅尾勝哉・山元和彦	140
	飾	舘 秀樹	
156.	芳香族ポリアミド微粒子の創製および機能化	○吉岡弥生	140
157.	芳香族ポリアミド微粒子のモルフォロジーと特性	○吉岡弥生・浅尾勝哉・山元和彦	140
		舘 秀樹	
158.	種々の形状を有する TiO ₂ 微粒子光触媒	○日置亜也子	141
159.	ポリベンゾオキサゾール微粒子の作製と評価	○舘 秀樹・浅尾勝哉・山元和彦	141
		吉岡弥生	
160.	高い耐熱性を有するポリベンゾオキサゾール微粒子の作製方法	○舘 秀樹・浅尾勝哉・山元和彦	141
	と粒子径制御	吉岡弥生	
161.	ポリベンゾオキサゾール微粒子の開発	○舘 秀樹	141
162.	新規なポリベンゾオキサゾール微粒子の連続合成方法	○舘 秀樹・浅尾勝哉・山元和彦	141
		吉岡弥生	
163.	感光性基をもつスピロインダン誘導体の合成と光化学特性	○井上陽太郎・櫻井芳昭	141
164.	バーナの火炎検知と着火挙動に関する研究	○東 忠宏・井本泰造・磯田 徹	142
165.	バーナの火炎検知と着火挙動に関する研究	○東 忠宏・井本泰造・磯田 徹	142
166.	多孔質イオン交換膜を用いた細菌センシングの解析	藤原信明・○他	142
167.	カーボンナノチューブの製糸に関する研究(第2報)	○喜多幸司・赤井智幸・西村正樹	142
		他	
168.	カーボンナノチューブの製糸に関する研究(第3報)	○喜多幸司・赤井智幸・西村正樹	142
		他	
169.	水中プラズマによる染料液の脱色	○田原 充・林 寛一	142
170.	パルスコロナ/酵素処理羊毛の反応染料に対する染色性:繊維 構造変化と染色性	田原 充・〇他	143
171.	酸化剤/酵素処理羊毛の酸性染料に対する染色性:染料の構造と	田原 充・〇他	143
	染色性		
172.	プラズマ重合による PTFE の接着性改善	田原 充・〇他	143
173.	廃棄物処分場に設置された一体型複合遮水シートの破損に対す	赤井智幸・西村正樹・〇他	143
	る研究(その2) 一破損後の漏水に対する抵抗性-		
174.	繊状高分子混合による土質系遮水材料を用いた海面処分場の遮	赤井智幸・馬渕伸明・〇他	144
	水上(その1, 数値解析)		
175.	繊状局分子混合による土貿糸遮水材料を用いた海面処分場の遮 トエイスの2	亦开智辛・西村止樹・〇他	144
		$\sim dut + d$	
176.	タオル製品の快適性 ーやわらかさと吸水性からの分析 ー ニネル 相い 相い はいにん にたい こう これ 相い にしい		144
177.	廃棄物処分場に設置された一体型複合遮水シートの破損に対す	○西村止樹・亦开智辛・他	144
170	一般損適程における抵抗性一		
178.	海面廃棄物最終処分場用途の遮水シートと不織布保護マット間 の摩擦特性評価	○四村止樹・亦开智辛・他	144
179.	線状高分子混合処理土を用いた遮水工法の開発	○西村正樹・赤井智幸・馬渕伸明	144
180.	線状高分子混合処理土を用いた遮水工法の開発	○西村正樹・馬渕伸明・赤井 智幸	145
181.	線状高分子混合処理土の特性に及ぼす繊維種の影響	○西村正樹・赤井智幸・他	145
182.	ガス透過性現場評価方法の検討	○西村正樹・赤井智幸・他	145
183.	拡張 π 共役系配位子を有する燐光性白金 (II) 錯体を用いた PLED	汐崎久芳・櫻井芳昭・〇他	145
	素子の作製		

184.	拡張 π 共役系配位子を有する燐光性白金 (II) 錯体の合成	汐崎久芳・櫻井芳昭・○他	145
185.	市販淡色手袋革の染色摩擦堅ろう性	○稲次俊敬・藤田恵美・他	145
186.	塗装仕上げの違いが革の特性に及ぼす影響	○稲次俊敬・藤田恵美・他	146
187.	メソポーラスシリカへの高濃度四配位 Ti 酸化物種の導入とその	○道志 智・他	146
	触媒特性		
188.	A Consideration of Evaluation Method for Leather Odor	○佐藤恭司・奥村 章・稲次俊敬	146
		道志 智・藤田恵美・他	
189.	皮革製品の臭い評価方法に関する一考察	○佐藤恭司・奥村 章・稲次俊敬	146
		道志 智・藤田恵美・他	

平成 18 年度研究発表会

Γ

1.	微細溝を有する形状の射出成形技術	○吉川忠作・奥村俊彦	147
2.	マグネシウム合金のプレス成形とその周辺技術	○白川信彦・宮田良雄・中本貴之	147
3.	半導体レーザを用いた鉄鋼材料の表面硬化処理	○萩野秀樹・宮田良雄	147
4.	炭素鋼粉末による金属 RP 造形物の高強度化	○中本貴之・白川信彦・宮田良雄	147
5.	放電/研削ハイブリッド加工による高能率微細加工	○渡邊幸司・南 久・藤原久一増井清徳	147
6.	真空浸炭における熱天秤を用いた炭素流入速度の測定	○星野英光・水越朋之・横山雄二郎 石神逸男	147
7.	球状バナジウム炭化物を含有させた鉄系耐摩耗低熱膨張材料の 開発	○武村 守・橘堂 忠・松室光昭 出水 敬・他	147
8.	金属粉末添加によりその場生成させた Al ₃ Ni 粒子強化 Al 合金の 作製と機械的性質	○松室光昭・橘堂 忠	148
9.	摩擦攪拌接合 (FSW) したアルミニウム合金の機械的特性	○平田智丈・小栗泰造・萩野秀樹田中 努・他	148
10.	耐熱性表面材料の開発 – Fe-W 合金めっき皮膜の熱特性-	○森河 務・西村 崇・中出卓男 左藤眞市	148
11.	UBM スパッタ法により形成した DLC 膜のナノインデンテーショ ン硬さに及ぼす被覆条件の影響	○三浦健一・中村守正	148
12.	密着力と防食性に優れたアルミナ溶射皮膜の開発(II)	○足立振一郎・岡本 明・上田順弘	148
13.	アークイオンプレーティング法による CrN 皮膜中のドロップ レット数に及ぼす被覆条件の影響	○榮川元雄	149
14.	鉄表面上でのアミン系腐食抑制剤の化学吸着に関する理論的研究	○左藤眞市	149
15.	パルス電解法による白金軽合金微粒子の開発	○西村 崇・横井昌幸・森河 務	149
16.	皮膜残留応力を考慮したスクラッチ試験による DLC 膜の密着性 評価法の検討	○中村守正・三浦健一	149
17.	三次元摩擦撹拌接合システム -三次元形状に沿った軽金属の接合-	○谷口正志・大川裕蔵・杉井春夫	149
18.	携帯電話を利用した農作物トレーサビリティ支援システムの実 用化	○竹田裕紀・新田 仁	149
19.	日常生活を支援するロボット要素技術の開発 	○朴 忠植・北川貴弘・中谷幸太郎 松元光輝・他	150
20.	大阪府産技研での IPv6(次世代インターネットプロトコル)利活 用について	〇石島 悌・平松初珠	150

21.	企業システムへの無償オープンソースデータベースの導入事例	○新田 仁・竹田裕紀	150
22.	歩行車や搬送台車に利用できる段差乗り越え機構の開発	○北川貴弘・朴 忠植・中谷幸太郎	150
23.	Web アプリ記述言語 (PHP) を用いたインターネット相談システ ムの構築	○平松初珠	150
24.	輸送中の包装貨物が受ける振動について	○高田利夫・寺岸義春・森岡亮治郎岡市 敏・津田和城・中嶋隆勝	150
25.	床ずれ発症を予防できる寝具に求められる性能	○木村裕和・山本貴則・片桐真子	151
26.	包装貨物の共振現象を音の測定解析により検出する手法	○君田隆男・中嶋隆勝・津田靖子	151
27.	梱包製品の輸送時に生じる複雑な振動挙動に関する実験的検証	○津田和城・中嶋隆勝・寺岸義春 高田利夫・他	151
28.	マスク開口率によるドライエッチング深さ制御	○森脇耕介・佐藤和郎・福田宏輝	151
29.	高分子・プラスチック基板のガスバリア性評価方法の開発	○岡本昭夫・松永 崇	151
30.	酸化クロム薄膜ストレインゲージを利用した触覚センサの試作	○筧 芳治・日下忠興・岡本昭夫	151
		松永 崇・佐藤和郎・吉竹正明 山元和彦・小栗泰造	
31.	アルゴン雰囲気中でアニール処理した Zn ₂ SnO ₄ 薄膜の電気特性	○佐藤和郎・筧 芳治・森脇耕介 村上修一・岡本昭夫	152
32.	超音波マイクロアレイセンサの特性改善	○田中恒久・井上幸二・他	152
33.	日常生活を支援するロボット要素技術の開発	○村上修一・宇野真由美・佐藤和郎	152
	-人体検知用赤外線センサ-	井上幸二・他	
34.	化学溶液堆積法による Ba(Ti,Zr)O ₃ 強誘電体薄膜の作製	○村上修一・宇野真由美・佐藤和郎 他	152
35.	高分子基材上への DLC コーティング	○松永 崇・岡本昭夫	152
36.	ドライエッチングによるシリコンの溝加工		152
37.	誘電ボロメータ型赤外線センサの高性能化	○字野真由美・村上修一・井上幸二	153
		他	
38.	固体高分子型燃料電池用触媒電極薄膜の開発と評価	○松本茂生	153
39.	ポリアミド酸微粒子の分子量測定	○山元和彦・浅尾勝哉・吉岡弥生	153
		舘 秀樹	
40.	新規コア-シェル型ポリマー微粒子の調製と複合化	○木本正樹	153
41.	有機無機ナノ複合化による超撥水性材料の開発	○木本正樹・他	153
42.	機能性ポリイミド微粒子の開発	○浅尾勝哉	153
43.	化学気相反応による SiC 多孔質粉末の合成とパルス通電焼結法	○垣辻 篤・他	154
	による焼結		
44.	透過型電子顕微鏡 (TEM) を用いた Ba 系単結晶薄膜の微細構造 解析	○久米秀樹・他	154
45.	分散安定性に優れた芳香族ポリアミド微粒子の開発	○吉岡弥生	154
46.	放電プラズマ焼結法によるイオン伝導性セラミックスの作製	○西川 義人・他	154
47.	高い耐熱性を有する新規高分子微粒子の作製方法	○舘 秀樹	154
48.	燃焼安全制御のためのバーナ火炎分光放射強度計測	○井本泰造・東 忠宏	154
49.	生分解性資材の使用による土壌環境の健全性評価	○増井昭彦・井川 聡・藤原信明	155
50.	各種内装材から放散される室内空気汚染物質の測定	○小河 宏	155
51.	環境有害物質の分析と規制動向	○中島陽一・林 寛一	155
52.	カーボンナノチューブ繊維状集合体の作製とその物性	○喜多幸司・赤井智幸・西村正樹	155
		他	
53.	III 価鉄を利用したヒドロキシラジカルによる VOC 処理技術の	○林 寛一・中島陽一	155

開発

54.	直流パルスによる水中プラズマの生成	○田原 充・林 寛一	155
55.	高分子製品中の有害物質のスクリーニング	○浅澤英夫・中島陽一・林 寛一	156
		小河 宏・塚本崇紘・他	
56.	羊毛由来蛋白を用いた身体・環境に優しい樹脂代替加工	○菅井實夫・増田敏男・他	156
57.	タオル製品の快適性 -手触り感覚の考察-	○宮崎克彦・馬渕伸明・宮崎逸代	156
58.	カーボンナノチューブ撚糸の作製とその物性	○西村正樹・喜多幸司・赤井智幸	156
		他	
59.	ジオシンセティックス材料の廃棄物処分場キャッピング用途へ	○西村正樹・赤井智幸・他	156
	の適用		
60.	チタニルポルフィリン消色反応についての分子軌道計算	○汐崎久芳	156
61.	正倉院の皮革製宝物材質調査	○奥村 章	156
62.	無機系抗菌剤による各種素材の新しい加工方法	○道志 智	157

産業財産権

1.	ガスセンサ	161
2.	光触媒体の製造方法	161
3.	チタン材の着色方法,及び描画方法	161
4.	光触媒体の形成方法	161
5.	光触媒膜及びその製造方法	161
6.	硫酸銅めっき方法	161
7.	光触媒体の作製方法	162
8.	履物底用静電気除去具及び静電気除去履物底	162
9.	めっき用不溶性陽極	162
10.	電磁波中の磁界の発生が少ない発熱体及びその製造方法	162
11.	球状炭化物合金白鋳鉄	162
12.	原料吹き付け式カーボンナノ構造物製造方法及び装置	162

(〇印は講演者、〔他〕は職員以外の共同研究者)

技術報告及び技術論文概要

【技術報告】

速度論的解析モデルに基づいたガス浸炭の制御法の提案

石神逸男 水越朋之 横山雄二郎 星野英光 三浦健一 浦谷文博

現在のガス浸炭は、鋼を一定のカーボン・ポテンシャル (CP) を有した雰囲気ガス中で加熱す ることによって行われている.この方式では炉内への酸素混入を防止するため、炉内圧を大気 圧よりも若干高めに設定し、ガスブリーダーや材料の挿入・排出扉から雰囲気ガスを燃焼排出 させている.そのため大量のエネルギーとガス資源を消費するばかりでなく、CO₂ 排出による 大気汚染の一因ともなっている.本稿では、CP 制御の理論背景を簡単に説明した後、現在のガ ス浸炭法の問題点と CP 制御に基づくかぎりそれらの解決策は限界にあることの根拠を示す.そ のうえで、ガス浸炭の新しい制御法に向けて、複数の浸炭反応を考慮した速度論的解析モデル を構築したことと、その精度の検証結果について述べる.さらに、CP 制御法では困難であった 雰囲気変動下での制御も可能なことの例示を行うとともに、本モデルが新しい熱処理線図の考 案や、新しい浸炭熱処理法を開発する際の有力な支援手段になりうることを述べる.

新規合成法によるポリイミド微粒子の調製

舘 秀樹

ポリイミドは耐熱性,電気絶縁性,耐薬品性に非常に優れ,航空宇宙産業用材料からプリント基板,レジスト材料に至るまでその特性を生かし様々な分野で用いられている.そのほとんどがバルク,ワニス,フィルムで用いられておりポリイミド微粒子,特にサブミクロン以下のナノスケールの微粒子に関する報告はほとんど無い.一般的にポリイミド合成法として酸無水物とジアミンを用いた方法がよく用いられる.一方で酸無水物とジイソシアネートを用いた反応は,触媒存在下,比較的低温で七員環中間体を経由して,イミド環を与えるため,アミド酸中間体を経由しないポリイミドの合成が可能である.本研究では酸無水物とジイソシアネートの反応を用いた新しいポリイミド微粒子の合成法を開発した.また,反応条件により多孔性ポリイミド微粒子の合成にも成功した.イソシアネート法によるポリイミド微粒子調製を行い,その反応条件について検討した結果について報告する.

ギガビットネットワークを中心とした所内 LAN の再構築

平松初珠 石島 悌 中辻秀和

当研究所では,1996年の移転時に100 MbpsのFDDIを核とした所内LANを導入した.しかし, ネットワークの利用の変化や機器のメンテナンスなどの点で,さまざまな問題が顕在化してき たため、ネットワークを再構築した。今回は、レイヤー3スイッチとレイヤー2スイッチをツ リー型に配置したギガビットネットワークを構築した。末端へは、レイヤー2スイッチを経由し、 既存の2対4芯のUTPケーブルを通って100 Mbps、もしくは10 Mbpsで接続される。ネットワー クの移行は、古いネットワークと新しいネットワークを共存させ、段階的に置き換える方法で 行った。また、近い将来普及すると言われている IPv6の対応や、末端の2対4芯のUTPケーブ ルを2本用いてギガビット通信の試みを行った。さらに、ネットワークの性能評価を行い、予 想通り再構築したネットワークが高速化されていることを検証した。本稿では、再構築に到る 過程とネットワークの移行を中心に上記について報告する。

高分子製品中の有害物質のスクリーニング

浅澤英夫 塚本崇紘

近年, EUでの環境負荷物質規制 (RoHS, WEEE, ELV) の影響により, これらの管理の重要性が 認識され, 有害金属分析の要望が高まってきている. 有害金属の定量には, 原子吸光分析や高 周波プラズマ発光 (ICP) 分析が高感度の分析として知られているが, 煩雑な前処理のための時間 と熟練が必要である. しかし, 高分子中の有害金属の定量を迅速に行いたいとの多くの要望に 対しては, これらの分析方法では応えられない. そこで, 現在, 簡易にスクリーニングできる ことで注目されているのが蛍光X線分析法である. これは, 試料の前処理をほとんど行う必要 がなく, 簡便かつ迅速に簡易定性定量を行うことができるため, 当研究所においても, この機 器による依頼試験および機器貸与が急増している. 当系の保有する機器でも一般的には, 機器 付属の簡易定性定量分析ソフトで標準試料を使用せずに分析することが多い. しかし, より適 切な環境負荷物質規制対応のスクリーニングを行うには, 標準試料による検出限界, 精度, 正 確さの検定が必要である. 市販の標準試料はあるが, 高価であり, 濃度範囲が限定されること が問題である. そこで本研究では高分子に有害金属 (Pb, Cd, Cr, Hg) を含む標準試料を作製し, これらの課題に対処することを目的とし, 検討を行った.

輸送包装の標準化と 3R

寺岸義春

我国で経済復興と産業発展のツールのひとつとして,輸送包装の「標準化」が叫ばれ,輸送 機関や製品出荷企業,包装材企業で「標準化」の取組みが始まったのは1960年初頭である.以来, ほぼ 50年経過し輸送包装の「標準化」も包装材料,容器,輸送機器から評価試験までJIS 化が 進み,現在では生産のグローバル化に伴い,国際標準化(ISO)まで進展してきた.一方,昨年① 容器包装リサイクル法と,環境負荷低減のために②省エネ法が改正され,①では 3R (Reduce – 廃棄物の発生抑制, Reuse – 再使用, Recycle – 再資源化)の推進,②では大手の出荷企業と輸 送企業に排出する CO₂を毎年1%削減する義務が課された.これを受けて輸送包装の現場では, 両法律を履行するため,これまで以上に標準化による輸送効率の向上と 3R を推進しなければな らない状況になっている.ここでは,当所で実施している輸送包装の評価試験等でできる 3R や, 現状の輸送包装の標準化について考察し,これからの輸送包装のあり方について紹介する.

【技術論文】

電子サイクロトロン共鳴プラズマを用いた スズ添加酸化インジウム薄膜の表面改質

筧 芳治 佐藤和郎 北畠顕英

小川倉一 中島嘉之 中野信夫

次世代ディスプレイとして期待されている有機電界発光(有機 EL)素子を利用したディスプレ イは、電極層、キャリア輸送層、発光層など機能分離された層によるサンドウィッチ構造で構 成されており、陽極よりホールが、陰極より電子が抵抗率の高い有機層(発光層)に注入され、 再結合により発光するキャリア注入型素子である.従って、抵抗率の高い有機層への高密度の キャリア注入は、有機 EL 素子にとって非常に重要な問題であり、キャリア注入に重要な役割を 果たしている電極材料は、素子の発光特性や寿命などへ与える影響が極めて大きいと考えられ ている.そこで今回、一般に陽極に使用されている錫添加酸化インジウム(ITO)薄膜に対して、 電子サイクロトロン共鳴(Electron Cyclotron Resonance: ECR)プラズマ中で生成されたイオン・ラ ジカルを照射し、陽極材料として重要な特性である仕事関数の増加および表面平坦生の向上を 試みた.その結果、マイナス側の基板バイアス電圧を印加することにより、ITO 薄膜表面の仕事 関数および平坦性を同時に大きく改善できることを見出したので報告する.

超精密加工機における位置決めの高精度化 -環境補正装置によるレーザ測長誤差低減-

足立和俊 山口勝己 本田索郎

複雑・微細形状等の超精密加工は,非常に長い加工時間を要し,加工中の環境変化が加工精 度に大きく影響を及ぼす.特に,レーザ干渉測長器を位置決め機構に利用する超精密加工機を 用いた場合,温・湿度が管理された環境下では,加工機の熱変形よりも気圧の変化にともなうレー ザ測長誤差が,直接仕上げ面に転写され,加工対象の形状精度を決定する主な要因となっている. 本研究では,逐次変化する気圧・温度・湿度を計測してその影響を反映させる環境補正装置を 試作し,超精密加工機の位置計測系に導入した.一方で,より正確な補正のためには,干渉系 における光路差ゼロの位置と加工機の原点位置の間(いわゆるデッドパス)の長さに関する補正 が必要であり,デッドパス長さの推定を実験で行うとともに,その長さを用いてより高精度な 補正を実施した.試作した装置の有効性は,軸停止時における工具-工作物間の相対変位測定 及びモデル加工実験により評価した.その結果,補正を行わなかった場合と比較して,加工機 位置決め精度が著しく改善され,加工精度を向上できることを実証した. 4

スクラッチ試験と180 度曲げ試験による DLC 膜の密着性評価法の検討

中村守正 三浦健一 松岡 敬 平山朋子

DLC(Diamond-like Carbon) 膜は,低摩擦性と耐摩耗性を兼ね備えた皮膜として広く注目されて おり,実用化研究が進められている.そのような DLC 膜の密着性評価には,スクラッチ試験が 多用されているが,スクラッチ試験の結果には皮膜の硬さなど密着性以外の膜特性が含まれて いることから,密着性のみを評価する方法を確立する必要がある.本論文では,スクラッチ試 験の結果から皮膜の密着エネルギーを算出する Bull らのモデル式を基に,皮膜の残留応力を考 慮した新たなモデル式を考案し,これを UBMS(Unbalanced Magnetron Sputtering) 法で形成した DLC 膜に適用することにより,密着性評価法としての妥当性を検証した.検証は,別に考案し た 180 度曲げ試験によるモデル式から密着エネルギー比例変数を算出し,比較することで行った. その結果,両者から推測される密着性の変化は,被覆条件に対して極めてよく一致した.全く 異なる外力によりはく離させたにもかかわらず密着性の変化がよく一致したことから,両モデ ル式を用いて DLC 膜の密着性評価が可能であることが確認できた.

インテリジェントな徐放性システムを利用した新しい殺菌方法の開発 一切削油から分離した P. aeruginosa のプロテアーゼの精製とその性質-

增井昭彦 藤原信明 Ivanka Karadzic

著者らは、水溶性切削油の腐敗防止と殺菌剤使用量の削減のため、殺菌剤・酵素をゼラチン に固定化させ、腐敗菌 (*Pseudomonas aeruginosa*) が分泌するプロテアーゼにより、殺菌剤・酵素 が放出されるインテリジェントな殺菌システムを提案している.本システムにおいて、ゼラチ ンの分解と薬剤の放出は、プロテアーゼの作用によって制御されている.そのため、本システ ムを確立するには、このプロテアーゼの性質を明らかにする必要があり、酵素を精製し、その 特性を調べた.その結果、本酵素は分子量約 19 kDa、至適温度は 60 °C、至適 pH は 9.0 であり、 pH 6 以上で安定であった.さらに本酵素は、メタノール、エタノール、N,N-ジメチルホルムア ミドなどの有機溶媒存在下で安定であった.

高密着力 Ti-Al 溶射皮膜の開発

足立振一郎

Ti と Al は金属の中では比較的安全性が高いとされており、またアルミナセラミックスとの親 和性が高い.そこで、Ti 粉末と Al 粉末の混合粉末をプラズマ溶射して得られる Ti-Al 皮膜はア ルミナ溶射皮膜の下地溶射皮膜として適用が期待される.本報告では、鉄鋼基材に溶射した Ti-Al 皮膜の組織および反応相を SEM および X 線回折により調べた.また、Ti 粉末と Al 粉末の配 合比率、プラズマトーチへの投入電力などの溶射条件、および基材の表面粗さが密着力に及ぼ す影響を検討した.その結果、Ti-Al 皮膜は主に TiN_{0.3}、TiNO および Al で構成されており、皮 膜の構造は Ti 化合物相と Al 相がラメラー組織を形成して亀裂など欠陥の少ない緻密なことを確 認した.また,密着力は溶射条件に影響され,Ti化合物相の酸化および窒化の度合いと相関関係が認められた.Ti-Al皮膜と鉄鋼基材の界面における密着機構は基材表面粗さによるアンカー効果およびAl相の金属結合の相乗効果によることが推察された.これらにより,鉄鋼基材に対して高い密着力を有するTi-Al皮膜を製作することが可能になった.

5軸摩擦攪拌接合装置の開発(第2報)

大川裕蔵 谷口正志 杉井春夫 丸谷洋二

摩擦攪拌接合(以下 FSW [Friction Stir Welding]と略す.)は金属を溶融させることなく塑性流動によって固相で接合する技術で,材質劣化が少なく継手効率も高い接合方法として注目を浴びている.この技術が Al 合金, Mg 合金などに応用されるのは接合部での結晶粒の粗大化が抑えられ,結果として接合部の機械的強度が非接合部に比べ,劣化しない特徴を有しているためである.しかし実用されている分野は直線接合だけであり,曲線や曲面上での接合はほとんど行われていなかった.その大きな理由は回転ツールの位置と姿勢を制御するソフトウェア,ハードウェアの開発が遅れていることにある.筆者らは平成 16 年度より開始したプロジェクト,都市エリア産官学連携促進事業(大阪東部エリア)『次世代の高品位接合技術の開発』において,研究テーマの一つとして,FSW による 3 次元形状の部材接合の自動化について取り組んできた.この研究を進めるにあたり 5 軸の FSW 装置を開発・試作し,それを用いてアルミニウム板の 3 次元曲面接合を実施したので報告する.

線状高分子混合処理土における靱性向上メカニズムの検討

西村正樹 赤井智幸 嘉門雅史

近年の環境意識の高揚を背景に、より安全で信頼性ある廃棄物最終処分場の設計、建設が求 められており、わが国でも遮水構造や維持管理に対する基準が強化、明確化されてきている. また、陸上処分場建設が益々困難になる中、大規模でスケールメリットを活かせる海面処分場が、 大都市圏を中心に今後主流になっていくと考えられる.しかし、海面処分場は地盤条件や施工 条件が陸上とは異なり、陸上処分場に比べて考慮すべき課題が多い.さらに、海面処分場の遮 水構造には、圧密沈下や地震に起因する大変形に対しても遮水性能を維持できることが求めら れる.筆者らはこれまで、主に海面処分場への適用を目指し、地盤変形追随性(靱性)と遮水性 能を併せ持つ土質系遮水材料として、粘性土に固化材と線状高分子材料(短繊維)を混合した線 状高分子混合処理土(HCB; Hybrid Clay Barrier)を開発してきた.ここでは、HCBにおける靱性 向上メカニズムについての検討結果を報告する.

林 寬一 中島陽一 太田清久

環境意識の高まりからシックハウス症候群など人体に影響を及ぼす揮発性有機化合物 (VOC) や農薬など環境中有害有機化合物の無害化が叫ばれて久しい.現在無害化法として大気中 VOC については,活性炭フィルター法や燃焼触媒法と呼ばれる手法が知られている.また,環境中 有機化合物の分解にはオゾンを用いる方法や光触媒を利用することにより処理の高効率化を 図った研究も盛んに行われている.しかしながら,これらの方法は安全性・煩雑な作業・高維 持費などといった改善すべき問題も多くある.これまで我々は,「持続可能な社会」を目指し, 安全・安心な環境技術の開発を行うため,鉄を用いる水溶液中有機化合物の酸化分解処理法に 関する研究を行ってきた.鉄は地球上に比較的豊富にある元素である.また工業的には産業廃 棄物として再資源化等の必要性に関する問題もある.そこで,本稿では有効な鉄再利用法も視 野に入れ,鉄サビのひとつであるⅢ価鉄種を用いた環境中有機化合物分解検討を行い,得られ た結果および推定される反応の詳細について報告する.

技術報告

Proposal for Controlling Gas Carburizing on the Basis of Kinetics Model

Hideaki Hoshino	Ken'ichi Miura	Fumihiro Uratani
星野 英光 **	三浦 健一***	浦谷 文博 ****
Itsuo Ishigami	Tomoyuki Mizukoshi	Yujiro Yokoyama
石神 逸男*	水越 朋之**	横山 雄二郎 **

(2007年6月15日 受理)

キーワード:ガス浸炭,解析モデル,数値解析,炭素濃度分布,リアルタイム制

1. はじめに

自動車や建設機械などの動力伝達部品の代表的な表 面処理法である浸炭には厳しい品質保証が要求され る.そのため、この技術における大気汚染対策や省エ ネルギー・省資源については、どちらかと言えば二次 的な問題として取り扱われてきた.しかしながら、最 近の環境保護や資源問題に対する関心の高まりを背景 として、これまでの主流であったガス浸炭法に対して、 その改良やプロセスそのものが根本的に異なった浸炭 法の出現が強く求められている.

このような課題に対処するため,我々は新しい浸炭 プロセスの開発や処理パターンを改良する際の支援シ ステムを確立することを目的とした研究を行ってき た.具体的には,様々な方式の浸炭に適用できる解析 モデルを考案し,その解析結果を制御機器と連結させ, 炭素濃度分布を監視指標としたリアルタイム制御シス テムを構築することを目指した.

本稿では、ガス浸炭の挙動を忠実に表現できる解析 モデルを提示するとともに、それを用いた新しい制御 法について提案する.また、今後の展開に際しての課 題などについても述べる.

* 次長

- ** 機械金属部 金属材料系
- *** 機械金属部 金属表面処理系
- **** 元 機械金属部 金属表面処理系

なお,ガス浸炭とはプロセスがまったく異なる真空 浸炭への取り組みについてはすでに報告した¹⁾.

2. 現行のガス浸炭法の制御法と問題点

ガス浸炭法では,例えば,炭素濃度が0.8 mass%の 浸炭能力(カーボン・ポテンシャル:*C*_P)を有する雰 囲気中で鋼を加熱保持しておくと,いつかは鋼表面の 炭素濃度が0.8 mass%で,鋼内部に向かって漸減する 炭素濃度分布が得られるという平衡論の考え方に基づ



図1 ガス浸炭における炭素濃度分布の基本的な制御 方法 いている (図1参照).

ガス浸炭には変成炉と浸炭炉が用いられる.変成炉 ではプロパン,ブタンあるいは天然ガスなどの炭化水 素系ガスに適量の空気を混合した後,Ni触媒を充填 したレトルト内で高温加熱してCO,H₂,N₂を主な成 分とする搬送ガス(商標:RXガス)に変成する.こ のガスを浸炭炉に供給するが,浸炭炉に必要な最大量 を常に確保しておくために過剰に変成し,余剰ガスは ブリーダーから排出・燃焼させている.

このようにして得られた搬送ガスは浸炭炉に送られ るが、搬送ガスの Cp は 0.3 mass% 程度しかないので、 炭化水素系のエンリッチ・ガスを加えて所定の C_bを 有した雰囲気に調整する. その際, 浸炭反応によって 生じる酸化性ガス (H₂O, CO₂, O₂) が C_P を低下させ るため、それらをエンリッチ・ガスで浸炭性ガスに再 生し、酸化性ガスの分圧を一定に維持しなければなら ない. 例えば, 搬送ガスの原料にプロパンを用いた場 合,炭素肌焼鋼に対する Cp を 1223 K で 0.8 mass% と するには酸素分圧を 4.11 × 10⁻¹⁵ Pa に調整する必要が ある²⁾. このように, きわめて微量な酸素でも C_P に 大きく影響するため、 炉内への大気侵入を防ぐのに、 炉内圧を大気圧よりも若干高めにして材料挿入扉など の隙間から炉内ガスを絶えず噴出・燃焼させている. このようなプロセス原理上、ガス浸炭では大量のエネ ルギーや原料ガスを無駄に消費しており、試算による と鋼へ侵入する炭素は原料ガスの1割にも満たないと 言われている³⁾. 当然のことながら, 大気汚染の大き な原因ともなっている.

3. 浸炭挙動を表す速度論的解析モデル

上述のように,現行のガス浸炭法では平衡論に基づ いた制御を行っており,そのことに由来する課題を解 決するには平衡論以外の取り組みが必要である.浸炭 は炭素が鋼中へ侵入・拡散する物質移動現象であり, 平衡論と速度論のいずれも考慮しないと本質的に把握 することは困難な場合が多い.このような観点から, まず,ガス浸炭の速度論的解析モデルを考案し,その 精度を検証することにした.

鋼中における炭素の拡散現象は次式のフィックの第 2 法則で表される.

$$\frac{\partial C}{\partial t} = \frac{\partial}{\partial x} \left(D \frac{\partial C}{\partial x} \right)$$
(1)

ここで, *C* は鋼表面からの距離 *x* の位置における炭素 濃度, *t* は時間, *D* は炭素の拡散係数である.

次に, 浸炭開始直前の状態(初期条件)は

t=0において、すべてのxについて $C=C_0$ (2) となる.ただし、 C_0 は鋼母材の炭素濃度である.

さらに,雰囲気と鋼との境界での状況(境界条件) は,炭素が雰囲気から鋼中へ流入する速度(炭素流入 速度)をFとするとき,次式で表される.

$$F = -D \frac{\partial C}{\partial x} , \quad x = 0$$
 (3)

浸炭法にはガス浸炭以外にも真空浸炭やプラズマ浸炭 などがあるが、浸炭方式が異なると、炭素が雰囲気か ら鋼へ流入する状況、すなわち、浸炭反応の挙動が異 なってくる.それゆえ、境界条件の式(3)はそれぞれ の方式に応じてもっと具体的な表現で与えなくてはな らない.

ガス浸炭には次に示すような種々の反応が関与して いる. C は鋼中に固溶した炭素を表す.

$$CO + H_2 = \underline{C} + H_2O$$
(4)
$$2CO = \underline{C} + CO_2$$
(5)

$$CH_4 = \underline{C} + 2H_2 \tag{6}$$

したがって,雰囲気から鋼中への炭素流入は上記の複数の反応を通じて行われていると考えるのが合理的である.その場合の境界条件は,例えば,次のような形で与えられる⁴⁻⁶.

$$F = \sum_{i}^{n} k_{i} f_{i} \left(P_{\text{CO}}, P_{\text{H}_{2}}, P_{\text{H}_{2}\text{O}}, P_{\text{CO}_{2}}, P_{\text{O}_{2}} \right) \times \left(\frac{a_{\text{g}} - a_{\text{s}}}{a_{\text{s}}^{m_{i}}} \right) = -D \frac{\partial C}{\partial x} \quad (7)$$

ここで, k_i は各反応の速度定数, P_x はガス種 X の分圧, a_g と a_s はそれぞれ雰囲気と鋼表面における炭素の活 量である.

4. 実験方法

(1) 浸炭処理

浸炭はマッフル構造の箱形バッチ式生産用炉を用 い,ブタンガスを変成した搬送ガスによって行った.

試料は炭素肌焼鋼 S15CK($C_0 = 0.175$ mass%)で,寸 法・形状および化学組成は既報¹⁾のとおりである. 浸 炭条件は C_P を 0.8 mass% と 1.2 mass%,温度を 1173 K と 1223 K,時間を 1.8 ~ 14.4 ks とした. 浸炭の熱 処理線図を図 2 示す.まず,鋼を搬送ガス中で所定温 度まで昇温・均熱してからエンリッチを開始し(図中 の点 A), C_P が 0.8 mass% のときは 0.9 ks, 1.2 mass% のときは 1.8 ks で所定の C_P (図中の点 B)に到達する ように調節した.以下で述べる浸炭時間はエンリッチ 開始からの時間であり,例えば, C_P が 1.2 mass% で 浸炭時間 1.8 ks のデータは C_P が絶えず増加し続けた ときのものである.なお,通常の処理では,浸炭終了 後に濃度分布調整のための拡散処理が施されるが,本





稿では解析モデルの精度検証とその応用を主な内容と したため、意図的な拡散処理は行わず、浸炭終了後そ のまま油焼入れを行った実験に基づいて記述する.た だし、浸炭が終了してから鋼が油中浸漬されるまで約 0.18 ks を要し、この間にわずかな拡散が起こってい ると考えられる.

(2) 炭素濃度分布の測定

炭素濃度分布 (*C*-*x* 曲線) は平面研削とスパーク放 電発光分光分析の繰り返しによって求めた.定量化の ための検量線は 0.01 ~ 1.69 mass% の炭素濃度を有す る 10 種類の炭素鋼および低合金鋼から作成した.こ の検量線を用いて同じ鋼種の熱処理状態を種々変えた 試片で求めた分析値は同一試片の繰り返し分析の精度 に近く,浸炭層内の組織変化による分析誤差は生じな いものと判断できた⁷⁾.

5. 解析モデルとその精度検証

(1) 浸炭反応の律速段階

図 3 に *C*_pを 1.2 mass%, 温度を 1173 K として浸炭 時間 *t*_cを変えたときの炭素濃度分布を示す. この図か らガス浸炭を支配している過程を考察する.

まず,ガス浸炭における炭素輸送は次のような過程 を経て行われる[®].

- ①ガス雰囲気中での化学反応
- ② 境膜内での浸炭ガスの鋼表面への拡散ならびに 生成ガスの鋼表面から雰囲気中への拡散
- ③ 鋼表面での浸炭ガスと鋼との化学反応
- ④ 鋼表面から鋼内部への炭素の拡散
- ⑤ 鋼内部での化学反応(例えば,炭化物形成などを ともなった反応拡散)
- ところで, 表面濃度が常に一定に保たれ, 拡散係数



図3 ガス浸炭した S15CK の炭素濃度分布

Dが濃度依存性を示さないときの濃度分布は,表面からの深さ *x* の位置における炭素濃度を *C_x*,表面濃度 を *C_s* とするとき,誤差関数あるいは相補誤差関数を 用いて次のように表される⁹.

$$\frac{C_x - C_0}{C_s - C_0} = 1 - \operatorname{erf}\left(\frac{x}{2\sqrt{Dt_c}}\right) = \operatorname{erfc}\left(\frac{x}{2\sqrt{Dt_c}}\right) \quad (8)$$

浸炭速度が前記④の炭素拡散に律速されている場合, C_s は浸炭開始後瞬時にして C_P に達し,また一定温度 では D は定数とみなせるから,A を定数とするとき, ある特定の濃度 C_s を示す深さ x_{c_s} と浸炭時間 t_c の関係 は次式で表される.

(9)

 $x_{C_*} = A t_c^{1/2}$

すなわち,炭素拡散律速ではある特定の炭素濃度を 示す深さは浸炭時間の平方根に比例する.後述の解析 モデルを用いた計算によると,この関係はDが濃度 依存性を示す場合も成立する.図3の炭素濃度分布か ら 0.53 mass%(炭素肌焼鋼において,焼入油の冷却能 も考慮した実用的な意味での有効硬化層深さにおける 炭素濃度に相当¹⁰)を示す深さ x_{0.53}を読み取り,t_cの 平方根に対してプロットすると図4の○印のようにな る(●印は後述の解析モデルによる計算値).浸炭が 鋼中の炭素拡散に支配されているときの各点は破線で 示した原点を通る直線上に位置するはずであるが^{*10}, 長時間側の 14.4 ks を除くといずれも直線よりも下方 に偏倚しており,この段階では前述した境膜内におけ る各ガスの双方向拡散,あるいは鋼表面での化学反

^{*1)} 浸炭終了時から油中浸漬までの約 0.18 ks 間に拡散が起こっているとした場合は、拡散律速を仮定した計算結果であっても t_c-x_{0.53}線の延長線は原点を通っておらず、厳密には式 (9) が成立しない (図4の実線).



図4 浸炭時間 t_cの平方根に対する x_{0.53}の変化

応が律速していると考えられる.なお,図4のすべての計算結果は炭素拡散係数の濃度依存性を考慮しており,C.Wellsらのデータ¹¹⁾を回帰分析した次式を用いた.

 $D_0 = (4.725 - 5.374W_{\rm C} + 1.779W_{\rm C}^{2}) \times 10^{-5} \quad (10)$

 $Q = 154.5 - 21.04W_{\text{C}} - 3.285W_{\text{C}}^2$ (11) ここで、 D_0 は頻度因子 (m²·s⁻¹)、Qは活性化エネルギー (kJ·mol⁻¹)、 W_{C} は固溶炭素濃度 (mass%) であり、R を 気体定数 (8.31447/J·K⁻¹·mol⁻¹)、Tを温度 (K) とする

$$D = D_0 \exp\left(-\frac{Q}{RT}\right) \tag{12}$$

(2) 従来の方法による解析結果

とき、拡散係数 D は次式で与えられる。

ガス浸炭における F について,従来は次のような形 で与えているものが多い¹².

$F = \alpha (a_{\rm g} - a_{\rm s})$	(13)
$F = \beta \rho (C_{\rm p} - C_{\rm s})$	(14)

ここで、 α は反応速度係数、 β は有効反応速度定数、 ρ は鋼の密度である.

例えば,式(14)を用いて計算を行うにあたって, β の推奨値は 2 × 10⁻⁵ cm·s⁻¹ で^{*2)},炉内雰囲気の流動状態に応じて ±2 桁のオーダーで変化するとされている. しかし,その範囲はあまりにも広いため,図 3 から β 値を求めることにした.まず,図 3 の *C*-*x* 曲線を*x* について積分した炭素流入量 *M* を回帰分析することによって次式が得られる.



図5 浸炭時間 t_cにともなう炭素濃度差 (C_P-C_s) およ び炭素流入速度 F の変化

$$\begin{split} M &= 1.0865 \times 10^{-2} t_{\rm c}^{0.604} \qquad (15) \\ \texttt{ここで, } M(\mathrm{mol} \cdot \mathrm{m}^{-2}), \ t_{\rm c}(\mathrm{s}) \ \texttt{cb} \ \texttt{b}, \ F(\mathrm{mol} \cdot \mathrm{m}^{-2} \cdot \mathrm{s}^{-1}) \ \texttt{k} \\ (\mathrm{d} M/\mathrm{d} t_{\rm c}) \ \texttt{cb} \ \texttt{s} \ \texttt{5h} \ \texttt{s}. \end{split}$$

 $F = 6.562 \times 10^{-3} t_{c}^{-0.396}$ (16)式(14)と式(16)からβが求まるが、その結果を図5 に示す. (Cp-C)が非常に小さい浸炭後期を除いた浸 炭期では推奨値に近い値となっている. そこで、C₂ を1.2 mass% とし、1223 Kで1.8 s、1173 Kで7.2 ks の浸炭を行ったときの C-x 曲線について、式 (14) の B 値を種々変えて計算した結果を実測分布と比較したと ころ、それぞれ図6と図7のようになった。図6では $\beta = 5 \times 10^{-5} \text{ cm} \cdot \text{s}^{-1}, \quad \boxtimes 7 \text{ ct} \beta = 4 \times 10^{-5} \text{ cm} \cdot \text{s}^{-1} \text{ O} \geq$ きに実測分布に比較的近い曲線が得られているが、精 度はあまり高くない. これらのβ値は確かに指摘され た変動幅内にあり、βが各炉の固有値であれば、あら かじめβ値を求めておくことでこの解析法を参考的に 用いることはできる.しかしながら,βは境膜の厚さ や境膜内の物質移動にかかわる値であり、炉内の雰囲 気撹拌の程度や材料の積載状態に応じてガスの流動状 況が変化するため、同一炉であっても毎回の処理ごと にβ値が変わるはずである.しかも,図5に示したよ うに,β値は浸炭時間によっても変動する.したがっ て,精度の高い解析を行うには信頼できるβ値あるい は反応速度係数 α をあらかじめ求めておく必要がある が、それでも、不慮の炉気変動が生じた場合にはその 値自体が意味をなさなくなる.ましてや、炉内への大 気混入などで雰囲気組成に不測の変化が起こった場合 などへの対応はまったく不可能であり,雰囲気変動を 利用した新しいプロセスによる浸炭法の開発などには

^{*2)} 文献¹²⁾ではβの単位は s⁻¹となっているが, cm・s⁻¹が正しいと思われる. また, βを求めるにあたって, 同文献には (C_P-C_s)の単位が示されていないが, mass% ではなく割合とした.



図6 炭素濃度分布に対する式(14)の解析精度

まったく活用できない.

(3) 複数の浸炭反応を考慮した解析結果

浸炭層の管理指標は表面炭素濃度,有効浸炭層深さならびに全浸炭層深さである.例えば,表面炭素濃度は表面硬さに顕著に反映するものであり,耐摩耗性を 重視する浸炭では厳密に制御する必要があるが,表面 近傍における式(14)の計算精度はかなり低い.

これに対して,本研究では雰囲気組成を境界条件に 組み入れることによって雰囲気変動にも追従可能な解 析法を検討した. ガス浸炭における F について,反 応(4)~(6)を考慮した式(7)を境界条件として拡散方 程式を解いた結果を図7に実線で示した.式(14)よ りもはるかに高精度の解析が可能で、表面炭素濃度も 実測値とほとんど一致している. ここで, 計算に必要 な式 (7) の k_i と f_i には H. J. Grabke が整理したデータ を採用し¹³⁾,反応(4)~(6)に対する式(7)中のa_s^mを それぞれ $m_i = 0, 1, 0$ として計算を行った^{*3)}. また, 意図的な拡散は行わなかったが、焼入れするまでの
 0.18 ks 間に拡散が起こったものとした. さらに, C_p が浸炭開始から設定値に達するまでの詳細な経時デー タが得られなかったので、C_pが0.3 mass% から1.2 mass%(図2の点Aから点B)までの時間に対して一 次関数的に増加すると仮定して計算を行った.ただし, 本稿の他の解析結果は,図4の●値も含めて,すべて 二次関数的な C。 増加 (図 2 で点 B を頂点とする放物 線)を仮定している.図3の実測濃度分布に対する解



図7 炭素濃度分布に対する式(14)と(7)の解析精度

析結果を図8に示す. 浸炭時間が短いときには Cpの 経時変化に推定値を用いた影響が大きく表れ、表面近 傍での不一致が見られるが、それ以外の計算結果はか なりよく一致している.また,温度,t。および C。を種々 変化させた場合もある程度の精度で解析することがで きた (図9参照). 今回は C_p値の経時変化のみをデー タとし、それからガス組成を逆算する方法で解析した が、通常のガス浸炭炉は Cpを監視・調整するための ガス分析装置を保有しているので、その分析値を式(7) に逐一投入しながら解析すれば精度がさらに向上する ことはもちろん、リアルタイム制御への応用が可能と なり, 雰囲気安定を最優先にするという制約から解放 された制御法につなげることができる.また、大気汚 染対策や省エネルギー・省資源に対しては、従来とは まったく異なったプロセスの浸炭法の開発も必要であ るが、その際にも、既報¹⁾の解析法と本解析法は有効 な支援技術になるものと思われる.

6. 本解析モデルの適用性を高めるために

(1) 精度低下の要因例

前章(3)節では、本解析法がガス浸炭の挙動を忠実 に表現することができた例について述べた.しかしな がら、表1に示すように、今回の一連のデータでは計 算結果と一致しないものもあった.ただし、それらは 浸炭時間が延長しているにもかかわらず、表面炭素濃 度や有効浸炭層深さが減少するなど、明らかに不合理 な実験値を示している試片群(No.311 ~ No.314 およ び No.321 ~ No.324)の場合であり、むしろ実験精度

 ^{*3)} R. Collin らは反応 (4), (5), (6) に対してそれぞれ m_i = 0,
 1, 1 としているが⁴⁾,反応 (6) の速度は非常に遅く,いずれを採用しても結果に大きな相違はないと思われる.



図8 図3の炭素濃度分布に対する式(7)の解析結果

がそれほど良好でなかったことが原因と考えられる. 図8は各特性値がもっとも合理的な経時変化を示して いると思われる実験データ (No.331 ~ No.334) に対す る解析結果である.

ガス浸炭は成熟した表面熱処理法であるにもかかわ らず、いまだに様々なトラブルが発生する技術でもあ る.その一例を図 10 に示す.これは"ガス浸炭した 処理品の表面硬さが安定せずに困っている"との技術 相談を受けて調査した結果である.4台の生産炉に被 処理品と同時に清浄な鋼箔を挿入して浸炭を行い、そ



図9 炭素濃度分布における分析値と計算値の比較

の鋼箔の炭素濃度 C_Fと硫黄濃度を分析し,硫黄濃度 に対して C_F が設定 C_P値よりどれだけ低下していたか を示す. C_P値が同レベルの試片群では,硫黄濃度が 高くなるほど炭素濃度が減少する傾向が見られ,減少 の程度は設定 C_P値が高いときほど大きかった.硫黄 濃度の変動は被処理品に残留した油分の程度を反映し たものと思われるが,硫黄分が浸炭反応を阻害するこ とは既知のことである¹⁴⁾.このように解析モデルに 想定外の因子が関わったときは精度が見かけ上低下す る.解析モデルに考慮されていない現象が発現しない

試片	$C_{ m P}$	Т	t _c	$C_{\rm s}$	М	<i>x</i> _{0.53}	X _{+0.04}	計算結果
No.	(mass%)	(K)	(ks)	(mass%)	(mol•m-2)	(mm)	(mm)	との一致度
311	0.8	1173	1.8	0.60	0.6275	0.09	0.40	\bigtriangleup
312	0.8	1173	3.6	0.64	0.7487	0.13	0.49	\bigtriangleup
313	0.8	1173	7.2	0.71	1.374	0.28	0.73	0
314	0.8	1173	14.4	0.69	1.498	0.27	0.87	×
321	0.8	1223	1.8	0.54	0.5527	0.04	0.39	×
322	0.8	1223	3.6	0.59	0.8979	0.13	0.63	×
323	0.8	1223	7.2	0.77	1.918	0.39	0.95	0
324	0.8	1223	14.4	0.67	1.864	0.33	1.14	×
331	1.2	1173	1.8	0.88	1.006	0.20	0.42	\bigtriangleup
332	1.2	1173	3.6	1.06	1.531	0.28	0.56	0
333	1.2	1173	7.2	1.10	2.297	0.42	0.77	0
334	1.2	1173	14.4	1.17	3.547	0.65	1.07	0
341	1.2	1223	1.8	0.95	1.394	0.26	0.54	0
342	1.2	1223	3.6	1.00	1.835	0.34	0.70	\bigtriangleup
343	1.2	1223	7.2	1.21	3.624	0.65	1.08	\bigtriangleup
344	1.2	1223	14.4	1.21	4.565	0.82	1.48	0

表1 ブタンから変成した搬送ガスを用いて S15CK を浸炭したときの諸特性値と計算結果との一致度

 $C_{\rm P}$:カーボン・ポテンシャル設定値, $t_{\rm c}$:浸炭時間, $x_{0.53}$:炭素濃度 0.53mass% を示す位置までの深さで,炭素鋼 では有効浸炭層深さに相当¹⁰, $x_{+0.04}$:母材炭素濃度より 0.04mass% だけ高い濃度を示す位置までの深さで,全浸炭層深さに相当¹⁰



図10 ガス浸炭した鋼箔の硫黄と炭素の濃度の関係

ように作業者が留意することが重要である.

(2) 汎用性の拡張

これまでに述べた結果は,解析に必要なデータとし て H. J. Grabke がまとめた実験式¹³⁾を用いたものであ るが,実は浸炭後に意図的な拡散処理を行った場合に 対する解析では計算がオーバーフローした.これにつ いて検討したところ,反応(4)の速度定数が大きすぎ ると考えられた.これに対しては R.Collin らのデータ⁴⁾ を用いると問題なく解析することができる¹⁵⁾.

また、本稿では解析に必要な諸データが整っている 炭素肌焼鋼について述べたが、この鋼は焼入性が低く、 実際には焼入性を向上させる Cr、Mo、Ni などを含む 低合金肌焼鋼 (SCM、SNCM あるいは SCr 材) がよく 使われる.その場合、これらの合金元素は式 (7) の表 面炭素の活量 a。に影響をおよぼすが、F. Neuman らの Solubility Factor¹⁶⁾を考慮することで正確に解析できる ことを確かめている¹⁵⁾.

さらに、合金元素は炭素拡散係数に対してほとんど 影響しない^{17,18},逆に影響する¹⁹⁾との相反する報告が あるが、我々の実験では影響を無視しても精度よく解 析できた¹⁵⁾.ただし、真空浸炭の場合は、炭素肌焼鋼 S15CK と低合金肌焼鋼 SNCM815 を同一条件で処理し ても炭素濃度分布が明らかに異なっていた.ガス浸炭 と真空浸炭におけるこの相違は、真空浸炭では浸炭時 の表面炭素濃度を固溶限まで高めた後、真空下の拡散 で目標値まで減少させる飽和値調整法²⁰⁾を採用して いるが、炭素拡散係数の濃度依存性は高濃度ほど顕著 に現れること¹¹⁾が原因の一つと推定している.拡散 係数の D_0 とQを系統的に変えて解析した C-x 曲線を



図 11 CO-H₂-N₂系雰囲気中で浸炭したときの炭素濃 度分布に対する解析精度

実測値に合致させる方法²¹⁾によって拡散係数を求めることを試みたところ,実用に支障のない精度は確保できそうであり²²⁾,現在さらに詳細な検討を加えている.

(3) 浸炭機構の正確な把握の必要性

ガス浸炭では炭化水素系ガスから変成した CO, H₂, N₂を主成分とする搬送ガスを用いることはすで に述べたが,実験室的に混合した CO-H₂-N₂系混合ガ ス中で浸炭を行ったときに本解析モデルが適用できな い例を紹介する.

図 11 は CO-H₂-N₂ 系混合ガス中で (CO+H₂): N₂ = 1 : 1 とし, CO と H₂ の割合を種々変化させて浸炭した ときの炭素濃度分布である²³⁾. この実験では透明石 英管を用いた竪型の反応炉の上方から混合ガスを導入 し,下方から排出している. この反応ではこれまで 述べたガス浸炭の解析モデルを用いることはできな い.その理由は鋼と雰囲気の界面に酸化性ガスが存在 せず,その場合には,式(7)の f_i の P_{H_2O} , P_{CO_2} , P_{O_2} を 0 とすればよいわけではなく,酸化性ガスは a_g にも関 係してくるからである. 例えば,反応(4)が平衡状態 にあるときは次の関係が成立している²⁾.

$$\Delta G_{4}^{\circ} = - RT \ln K_{4} = - RT \ln \frac{a_{g} P_{H_{2}O}}{P_{CO} P_{H_{2}}}$$
(4a)

 $\Delta G_4^\circ = -127821 + 18.7443 T \log_{10} T + 78.4082 T$ (4b) ここで、 ΔG_4° は反応にともなう標準自由エネルギー変 化 (J)、K は平衡定数である.

反応(4)が起こると、H₂Oが生成するが、この実験 では反応ガスを反応管の上方から下方へ一方向に流し ているため、生成した H₂O は反応界面から絶えず除 去されており、カーボン・ポテンシャルの概念が適用 できない浸炭反応となっている。この反応では表面炭 素濃度が炭素固溶限に達するまでの炭素流入速度は常 に一定に保たれており、真空浸炭における化学反応律 速¹⁾と同じ挙動を示していた²³⁾.その場合の F は浸 炭ガス組成から推定することはできず、実測する必要 がある.その実測値を式(3)に投入して計算を行った ところ、図 11 の実線で示すように、高い精度で解析 することができた.なお、図 11 で CO: H₂ = 1:1の ときに浸炭速度が最大となっているが、このことは R. J. Fruehan がすでに報告しており²⁴⁾、最近になって 高濃度 CO による迅速浸炭法として実用化されてい る²⁵⁻²⁷⁾.

ガス浸炭は確かに CO-H₂-N₂ 系混合ガスによる浸炭 ではあるが,本稿の解析モデルでは,カーボン・ポテ ンシャルの概念が存在するということが前提である. もし,図11の実験で H₂O が反応界面に存在するよう な状況,例えば,反応ガスが滞留したり,循環する状 況で浸炭を行ったときは酸化性ガスが反応に関与する ようになる.当然のことながら,その場合は本稿のガ ス浸炭モデルを用いなくてはならない.

7.おわりに

本研究に携わることになったきっかけは,真空浸炭 が開発された当初"真空浸炭はガス浸炭よりもはるか に迅速な処理が可能である"と強調されすぎている印 象を受けたからである.プロセスがまったく異なる浸 炭技術を単に現象面だけで論じているように思えた. そこで,両者に対する速度論的解析モデルを考案し, 解析結果を種々検討することによって,浸炭速度の相 違は炭素固溶限,炭素拡散係数の濃度依存性および浸 炭ガスの種類などに応じて異なり,必ずしも真空浸炭 が迅速であるとは言えないことを示した⁵.

これまでのガス浸炭ではカーボン・ポテンシャルを 管理指標とした平衡論に基づく制御が行われており, この方法では雰囲気の安定維持が最優先にされてき た.本解析モデルは雰囲気変動にも追従しうる構成に なっており、炭素濃度分布を管理指標とする新たな制 御法につなげられるもので,これまでの様々な課題を 解決できると考えている.その観点に立ち,意図的に 雰囲気組成を変動させたときの解析に着手したが²⁸, それ以降の検討により,その精度をはるかに向上させ ることができている¹⁵.

現在は, 浸炭炉への搬送ガスの供給量を大幅に低減

させる処理方法や CO₂ 排出がない密閉型浸炭炉の開 発に向けて検討している.具体的には,各ガス成分の 分析値をリアルタイムに取り込みながらの解析を試み ているが,高い精度でその場解析ができることを確認 している.

参考文献

- 1) 石神逸男, 水越朋之, 横山雄二郎, 星野英光, 三浦健一, 浦谷文博:大阪府立産業技術総合研究所報告, No.16 (2002) p.35.
- 2) 石神逸男: 熱処理, 37 (1997) p.319.
- 3) 内藤武志: OE 技術通信, 第9号, オリエンタル エンヂ ニアリング株式会社, (2001) p.2.
- R. Collin, S. Gunnarson and D. Thulin: J. Iron Steel Inst., 210 (1972) p.785.
- 5) 石神逸男, 辻 新次, 浦谷文博, 綱澤榮二: 日本熱処理 技術協会第24回学術講演大会予稿集, (1987) p.29.
- Y. Yokoyama, T. Mizukoshi, I. Ishigami and T. Usui: Materials Science Forum, 522-523 (2006) p.589.
- 7) 浦谷文博,石神逸男, 辻 新次, 吉仲 平:大阪府立工 業技術研究所報告, No.87 (1985) p.46.
- R. Collin, M. Brachaczek and D. Thulin: J. Iron Steel Inst., 207 (1969) p.1122.
- 9) J. Crank: *The Mathematics of Diffusion, 2nd ed.*, Clarendon Press, Oxford (1975) p.32.
- 10) Metals Handbook, 9th ed., Vol.4, Heat Treating, ASM, Metals Park, Ohio (1981) p.277.
- 11) C. Wells, W. Batz and R. F. Mehl: Trans. AIME, **188** (1950) p.553.
- 12) ASM Handbook, Vol.4, Heat Treating, ASM International Handbook Committee (1995) p.315.
- 13) H. J. Grabke: Arch. Eisenhüttenwes., 46 (1975) p.75.
- 14) R. J. Fruehan: Met. Trans., 4 (1973) p.2129.
- 15) 水越朋之, 星野英光, 横山雄二郎, 平田智丈, 石神逸男: 日本熱処理技術協会 第 57 回講演大会講演概要集, (2003) p.43.
- 16) F. Neuman and B. Person: Härterei-Techn. Mitt., 23, Nr.4 (1968) S.296.
- 17) 邦武立郎:日本金属学会会報, 3 (1964) p.466.
- 18) 西沢泰二:日本金属学会会報, 12 (1973) p.408.
- M.A.Krishtal: *Diffusion Processes in Iron Alloys, Keter Press*, Israel Program for Scientific Translations, (1970) p.101.
- 20) J. Wünning, G. Leyens and G. Woelk: Härterei-Techn. Mitt., 31, Nr.3 (1976) S.132.
- 21) 鈴木茂:まてりあ, 38 (1999) p.559.
- 22) 石神逸男, 横山雄二郎, 三浦健一, 星野英光, 浦谷文博: 日本熱処理技術協会 第50回講演大会講演概要集, (2000) p.39.
- 23) 横山雄二郎,石神逸男,浦谷文博:大阪府立産業技術総 合研究所報告, No.13 (1999) p.48.
- 24) R. J. Fruehan: Met. Trans., 4 (1973) p.2123.
- 25) 中津裕之,下里吉計,紙谷 守:日本熱処理技術協会 第 55 回講演大会講演概要集,(2002) p.31.
- 26) 下里吉計,紙谷 守,中津裕之:工業加熱,40,4(2003) p.22.
- 27) (社)日本工業炉協会: THERMOTEC 2005 GUIDE BOOK, (2005) p.41, p.63.
- 28) 石神逸男:(財)谷川熱技術振興基金事業報告書, 23 (1999) p.28.

Novel Preparation of Polyimide Particles

舘 秀樹* Hideki Tachi

(2007年6月15日 受理)

キーワード:ポリイミド,ポリイミド前駆体,微粒子,イソシアネート法,多孔性ポリイミド微粒子

1. はじめに

ポリイミドはデュポン社が開発したスーパー・エン ジニアリング・プラスチックで,他の有機物や高分 子系材料と比べて高い耐熱性(500℃まで)を誇る上, 機械強度や耐薬品性,耐摩耗性,耐クリープ性,寸法 安定性など優れた物性を有している.また,誘電率も 低く(通常3.2~3.4),延性に富み,熱膨張係数が低 いことから,マイクロエレクトロニクス関連分野を中 心に様々な用途で応用開発が進んでいる¹⁾.近年では 優れた物性を生かして固体高分子型燃料電池用電解質 膜ポリマーや層間絶縁膜材料,半導体用コーティング 材料などへのポリイミドの利用が注目を集めている.

ポリイミドは,フィルムまたは溶液にポリイミドま たは前駆体であるポリアミド酸を溶解させたワニスの 形態で提供されることがほとんどである.国内では, 東レのフォトニースや宇部興産のユーピレックスなど がよく知られている.デュポン社がポリイミド粉末成 形品を提供しているが,ポリイミド粉末またはポリイ ミド微粒子を製品として販売している会社は無い.ポ リイミドを微粒子化することで,優れた物性を損なう ことなく,微粒子としての特徴を生かした新しい機能 性材料としての展開が期待できる.例えば,ポリイミ ドを微粒子の形態で提供することができれば,携帯電 話などの精密機器に用いられる微小部品の精密塗料, また,粉体塗料,フィルター,吸着剤やカラム充填材, 粉末成形用材料などの幅広い応用が可能となる.

ポリイミド微粒子に関する詳細な報告は、当研究所

の沈殿重合法を用いた単分散球形ポリイミド微粒子の 作製方法についてのみであり、その他には国内外を問 わずほとんど無い²⁻⁷⁾.本法はジアミンとカルボン酸 二無水物を用いて超音波照射下で反応させており、超 音波の周波数,溶液濃度,溶媒などによって微粒子の 形状や表面形態,粒子径の制御が可能であることを明 らかにしている.さらに、ポリイミド微粒子の表面を 官能基化する試みも行っている.また、筆者らはジイ ソシアネートとカルボン酸二無水物の反応から多孔性 ポリイミド微粒子を作製し、その作製方法に関する報 告を行っている⁸⁻¹⁰⁾.多孔性ポリイミド微粒子は耐熱 性や絶縁性に優れた吸着剤など非常に興味深い特性を 有することが予想される.

本報告ではイソシアネート法を用いた新しいポリイ ミド微粒子の作製方法について詳細に検討した結果を 報告する.

2. 一般的なポリイミド微粒子の作製方法

ポリイミド微粒子の調製方法には、バルク体を粉砕 する方法と化学的な合成方法を用いて単分散微粒子を 調製する方法がある.ここでは化学的な手法を用いて 合成されるポリイミド微粒子の調製方法について説明 する.これまでに報告されているポリイミド微粒子の 作製方法は、カルボン酸二無水物とジアミンを原料に 用いて超音波照射下で沈殿重合を行い、ポリイミド前 駆体であるポリアミド酸微粒子を得る方法である.こ のとき原料は溶解するが、生成するポリアミド酸は溶 解しないような溶媒を選択し、沈殿重合を行うことで 単分散ポリアミド酸微粒子を調製することができる.



図1 ポリイミド微粒子の作製方法 (a) ジアミンとカルボン酸二無水物の反応 (b) イソシアネート法

得られたポリアミド酸微粒子をトルエンやキシレン中 で熱イミド化することにより、ポリイミド微粒子を得 ることができる(図1-(a)).得られたポリイミド微粒 子の走査型電子顕微鏡(SEM)画像を図2に示す.こ の方法では、原料や反応条件により数十 nm から1 μm 程度の粒子径のポリイミド微粒子を調製することが可 能である.

3. イソシアネート法によるポリイミド微 粒子の作製

カルボン酸二無水物とジイソシアネートは七員環中 間体を経由して、二酸化炭素を発生しながらポリイミ ドを生成することが知られている(図1-(b))¹¹⁻¹³⁾. イ ソシアネート法を用いた新規ポリイミド微粒子作製方 法は、ジアミンとカルボン酸二無水物を用いたポリイ ミド作製方法(図1-(a))に比べ、大容量での作製が可 能であり、比較的粒子径の大きいもの(~数 μm)の作 製が容易である.反応時に超音波を照射するのは、反 応を均一系で行い、核となる微粒子を生成させるため である.その後、攪拌子を用いて攪拌することによっ て、ポリイミド前駆体微粒子を析出させることが可能 となる.反応に用いた化合物を図3に示す.

一例として,トリレン-2,4-ジイソシアネート(TDI) と3,3',4,4'-ベンゾフェノンテトラカルボン酸二無水 物(BTDA)を用いたポリイミド微粒子の作製例を示す (図4). BTDA 及び TDIのアセトン溶液(1 mmol)を 調製した. 触媒としてトリエチレンジアミン(TEDA) を用い,所定濃度のアセトン溶液を調製した. これら を25℃で混合し,超音波洗浄器を用いて超音波攪拌 下(周波数28 kHz,1時間)で混合溶液を反応させた. 次に,攪拌子を用いて約24時間攪拌を行い,ポリイ ミド前駆体微粒子を析出させた.遠心分離機を用いて 析出したポリイミド前駆体微粒子を回収し,アセトン で洗浄した.遠心分離,洗浄を繰り返し行い,ポリイ ミド前駆体微粒子の精製を行った.ポリイミド前駆体



図 2 ジアミンとカルボン酸二無水物を用いて調製し たポリイミド微粒子の SEM 画像 (a) ×5,000 (b) ×20,000



図3 用いた化合物



図 4 TDI と BTDA を用いて調製したポリイミド微粒 子の SEM 画像 (a) ×5,000 (b) ×10,000 (c) ×50,000



図5 BTDA とイソシアネートにより調製されたポリ イミド微粒子の SEM 画像 (a) TDI, (b) MDI, (c) XDI, (d) IPDI



ド前駆対微粒子の SEM 画像 (a) $\times 20,000$, (b) $\times 60,000$, (c) $\times 20,000$, (d) $\times 50,000$.

run ジ-	イソシアネート	カルボン酸二無水物	アミン	粒子径(nm)	粒子形態	熱分解温度 (℃)
1	TDI	BTDA	TEDA	1965.4	微粒子	530
2	MDI	BTDA	TEDA	不定形状	不定形状	525
3	XDI	BTDA	TEDA	不定形状	不定形状	531
4	IPDI	BTDA	TEDA	4910.0	微粒子	514
5	CHDI	HPMDA	TEDA	640.1	多孔性微粒子	343

表1 イソシアネート法を用いたポリイミド微粒子の	調製
---------------------------	----

超音波: 28kHz 1hr. 超音波照射後24hr攪拌

イミド化:n-ドデカン中で5hr還流.

微粒子を n- ドデカンに分散し, 210℃で 5 時間還流し, 熱イミド化を行い、ポリイミド微粒子を得た.精製は ポリイミド前駆体微粒子と同様の方法で行った.

得られたポリイミド微粒子は全芳香族ポリイミド であり,単分散で均一な球形粒子であることを確認し た. このポリイミド微粒子の平均粒径は 1965.4 nm, 標準偏差 240.56, 変動係数 12.19 であった. また, ポ リイミド微粒子の熱分解温度(5 wt% 重量減少温度) は 530℃で酸無水物とジアミンから定法で作製した全 芳香族ポリイミドとほぼ同等であった. 濃度や超音波 照射後の反応時間などの反応条件を変えることによっ て、平均粒子径を 500 ~ 30000 nm の範囲で、変動係 数 (CV 値) を 10 ~ 15 %の範囲で制御することが可能 であった. 同様の方法を用いていくつかの組合せを検 討し、ポリイミド微粒子を作製した.得られた微粒子 の SEM 写真を図 5 に、粒子径・粒子形態・熱分解温 度を表1に示す. ジイソシアネートに TDI とイソホ ロンジイソシアネート (IPDI) を用いたときのみ、球 形ポリイミド微粒子を得ることができた.得られたポ リイミド微粒子の粒子径は1 µm 以上で,表面は凹凸 が少なく滑らかであった. メチレンジフェニルジイソ シアネート (MDI) を用いたときには部分的に微粒子 が得られ, m-キシリレンジイソシアネート (XDI)を 用いたときには微粒子の融着物が得られた.このよう に粒子径・粒子形状は用いるジイソシアネートの種類 に大きく依存した. これは、用いるジイソシアネート の溶媒への溶解性と、イソシアネート基の反応速度の 差に起因すると考えられる.

4. 多孔性ポリイミド微粒子の作製

trans-1,4-シクロヘキシレンジイソシアネート (CHDI)と水添ピロメリット酸二無水物(リカシッド HPMDA:新日本理化(株)より提供)の組合せ(表1 の run 5) で反応を行うと多孔性ポリイミド前駆体が生 成,沈殿し,その後加熱イミド化を行うことで多孔性 ポリイミド微粒子を得ることができた.得られた多孔 性ポリイミド微粒子の SEM 写真を図 6 に示す. この 微粒子はポリイミド前駆体の段階で多孔性形状を有 し、イミド化後もその形状を変えることなく多孔性形 状を示しており、単分散の均一な球形粒子であった. その空孔は連続気泡で、微粒子の中まで空孔が貫通し ていることを確認した.また、この微粒子は直径10 ~ 20 nm の超微細微粒子の集合体であり, 平均粒径 640.1 nm,標準偏差 43.20,変動係数 6.75 で,空孔径 は10~30 nm であった. また, この微粒子の熱分解

500nm



図7 超音波周波数と平均粒子径の関係

温度 (5 wt% 重量減少温度)は 343℃であり,定法で作 製した同種の全脂肪族ポリイミドとほぼ同じ値を示し た.この微粒子の表面ζ電位は -27.34 mV であった.

得られた多孔性ポリイミド微粒子の周波数依存性に ついて検討した.微粒子作製時の照射超音波の周波数 と,得られた多孔性ポリイミド微粒子の粒子径の関係 を図7に示す.周波数を28~100 kHzまで変化させ たが,得られる前駆体微粒子の粒子径に変化は見られ なかった.また,超音波を照射せず,攪拌のみの場合 には,塊状のポリイミド前駆体が得られたことは,超 音波照射により,微粒子の核生成が促進されたことを 示唆している.また,照射超音波の周波数に粒子径や 粒子形状が影響を受けないのは,ポリイミド前駆体微 粒子が成長から沈殿するまでの時間に比べ,超音波照 射時間が短く影響が小さいためであると考えられる.

次に,多孔性ポリイミド微粒子の空孔形成に影響を 及ぼす因子について検討を行った.微粒子作製時に加 えたアミン触媒の量と,得られた微粒子の平均粒子径 との関係を図8に示す.アミン触媒添加量の増加に伴



図8 触媒アミン添加量と粒子径の関係

い,平均粒子径が大きくなり,多孔性微粒子の形状も 多孔性からヒダ状へと変化することが確認できた.他 の三級アミン触媒を用いた際も,ほぼ同様の傾向が見 られた.

これまでに、ジアミンと酸無水物から作製したポリ イミド微粒子は、その粒子径や形状が原料に依存する こと、メチルエチルケトン (MEK) やアセトフェノン などの溶媒中で微粒子作製を行うことで、粒子径を小 さくできることが報告されている⁷⁾.そこで、溶媒と 反応条件を選択することで、多孔性ポリイミド微粒子 の粒子径の制御を試みた.反応溶媒としてアセトン、 MEK、メチルイソブチルケトン (MIBK)、アセトフェ ノンを用い、生成するポリイミド微粒子の形状比較を 行った.それぞれの反応物の反応溶媒と形状の関係を 表2に示す.MEK を反応溶媒として用いた場合、多 孔性塊状物が生成し微粒子を得ることができなかっ た.また、MIBK を用いた場合は、同一の条件で微粒 子の凝集と融着が確認された.一方、反応溶媒にアセ トフェノンを用いた場合、粒子径 100~300 nm の多

run	ジイソシアネート ^{a)}	カルボン酸 二無水物 ^{a)}	アミン ^{a)}	溶媒	周波数 (kHz) ^{b)}	反応時間 _{c)}	形態
1	CHDI	HPMDA	TEDA	アセトン	28	24hr	多孔性微粒子
2	CHDI	HPMDA	TEDA	アセトン	45	24hr	多孔性微粒子
3	CHDI	HPMDA	TEDA	アセトン	100	24hr	多孔性微粒子
4	CHDI	HPMDA	TEDA	アセトン	28	72hr	凝集物
5	CHDI	HPMDA	TEDA	MEK	28	24hr	多孔性塊状物
6	CHDI	HPMDA	TEDA	MEK	28	72hr	多孔性塊状物
7	CHDI	HPMDA	TEDA	MIBK	28	24hr	凝集物
8	CHDI	HPMDA	TEDA	MIBK	28	72hr	凝集物
9	CHDI	HPMDA	TEDA	アセトフェノン	28	24hr	多孔性微粒子
10	CHDI	HPMDA	TEDA	アセトフェノン	28	72hr	多孔性凝集物

^{a)} CHDI:HPMDA:TEDA=3:3:1(モル比),CHDI(6.024×10⁻³ mol).イミド化:n-ドデカン中で5hr還流.

^{b)} 超音波照射1hr, ^{c)} 超音波照射後攪拌

孔性ポリイミド微粒子が作製可能であった.また,反応時間を長くすると(72 hr),アセトンおよびアセトフェノンのどちらを用いた場合でも,生成した多孔性ポリイミド前駆体微粒子間で凝集と融着が進行し,凝集物もしくは多孔性凝集物が得られた.すなわち,溶媒や反応条件を選択することで,多孔性ポリイミド微粒子の形態を制御することが可能である.

実験の結果から、微粒子の多孔化に影響を及ぼす因 子として、少なくとも①アミン触媒の量、②超音波照 射後の反応時間,③反応溶媒の三つがあげられる.例 えば、アセトン中で長時間反応を行った場合には、多 孔性微粒子が得られず,微粒子の凝集物が生成する. また、反応溶媒に MEK を用いた場合には、微粒子が 得られず多孔性塊状物が生成する. このことは、多孔 性微粒子形成においては、微粒子形成過程と形成途中 にある微粒子の多孔化の過程が、1つの系の中で平行 して起こっていることを示唆している. つまり, 微粒 子形成過程と形成途中にある微粒子の多孔化の過程 が,同時に存在する場合には,多孔性ポリイミド前駆 体微粒子を得ることができる.一方,微粒子形成が優 先的に起こる場合には微粒子の凝集物が、微粒子形成 が不十分で多孔化が進行する場合には、多孔性塊状物 が生成する.なお、得られた多孔性ポリイミド微粒子 は、その形態観察から数十 nm の超微粒子の集合体で あり連続気泡を有していることが認められる.

以上の結果から、多孔性ポリイミド微粒子の生成メ カニズムは、次のように予想される.

生成したポリイミド前駆体微粒子中には分子量の低 いオリゴマー成分や触媒が多量に含まれており, 微粒 子内に均一に分散したミクロ相分離構造を形成してい ると考えられる.溶媒による洗浄・抽出を繰り返すこ とによって, 微粒子中から相分離した物質が除去され, 連続気泡を有する多孔性ポリイミド前駆体微粒子が形 成される.得られた微粒子を加熱イミド化することで, 分子内架橋と相分離が進行し,多孔性ポリイミド微粒 子が生成する.

5. おわりに

イソシアネート法を用いた,新しいポリイミド微粒 子の調製方法について述べた.原料の組合せによって, 様々な形状,粒子径のポリイミド微粒子を得ることが できた.特定の原料の組合せで,多孔性ポリイミド微 粒子を作製することが可能であった.得られた多孔性 ポリイミド微粒子は全脂肪族ポリイミドであり,粒子 径 640 nm,熱分解温度は 343 ℃を示した.溶媒や濃度, 反応時間などで,多孔性形状に変化が見られた.本法 で得られた多孔性ポリイミド微粒子は,全脂肪族ポリ イミドであり連続気泡を有している.そのため,大き な比表面積と空気層による高い絶縁特性を有すると予 想される.このような多孔性ポリイミド微粒子の高い 耐熱性と比表面積を生かすことで,耐熱性カラム用充 填材や吸着剤などの用途へ応用可能である.また,高 い絶縁性を生かせば低誘電率特性を有する材料,例え ば層間絶縁膜としての用途が期待できる.

謝辞

本研究の一部は,独立行政法人新エネルギー・産業 技術総合開発機構 (NEDO)の産業技術研究助成事業の 助成金を受けて行った.

本研究を行うにあたり,水添ピロメリット酸二無水 物を提供していただいた新日本理化株式会社開発部 水谷利洋氏に深く感謝いたします.

参考文献

- 1) 都甲 明:躍進するポリイミドの最新動向 III, 住ベテク ノリサーチ社 (2004).
- 2) 浅尾勝哉, 大西 均, 森田 均: 高分子論文集, **57**, 5 (2000) p.271.
- 3) 浅尾勝哉:科学と工業, 80,1 (2006) p.27.
- 4) 大阪府 : 特開 2000-248063.
- 5) 大阪府:特許第 3478977 号 (2003).
- 6) 大阪府:特許第 3507943 号 (2004).
- 7) 浅尾勝哉:大阪府立産業技術総合研究所報告, No.20 (2006) p.69.
- 8) 大阪府: 特開 2004-292682.
- 9) 舘 秀樹,吉岡弥生:平成16年度産業技術研究助成事業成果報告書,独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(2004).
- 10) 舘 秀樹:高分子論文集, 64,1 (2007) p.50.
- N. D. Ghatge and U. P. Mulik: J. Polym. Sci., Chem. Ed., 18 (1980) p.1905.
- 12) G. D. Khune: J. Macromol. Sci. Chem., A14 (1980) p.687.
- 13) M. Kakimoto, R. Akiyama, Y. S. Negi, and Y. Imai: J. Polym. Chem., 26 (1988) p.99.

ギガビットネットワークを中心とした所内 LAN の再構築

Reconstruction of LAN Using Gigabit Network in TRI-Osaka

平松 初珠* 石島 悌* 中辻 秀和** Hatsumi Hiramatsu Dai Ishijima Hidekazu Nakatsuji

(2007年6月22日 受理)

キーワード:ギガビットネットワーク,再構築,LAN,レイヤー3スイッチ,レイヤー2スイッチ

1. はじめに

米国国防総省ネットワークとしてインターネットが 誕生してから約 40 年,日本にインターネットが登場 してから 20 年余りが経つ.この間,インターネット に接続している企業や家庭は,情報端末の普及と共に 増えてきた¹⁾.

国内の家庭向けインターネット接続サービスは,電 話回線を使用するダイヤルアップ接続から始まり, その後, ISDN (Integrated Services Digital Network), ADSL (Asymmetric Digital Subscriber Line), FTTH (Fiber To The Home) へと,より高速な通信サービスが 提供されてきた.そして,現在では100 Mbpsの通信 速度で常時インターネットに接続できる環境を,個人 で容易に整備できるまでになっている.さらに,最近 では,1 Gbpsのネットワークインターフェイスカー ドを標準で装備しているコンピュータが増えているこ とから,より高速なインターネット接続環境の普及が 期待される.

また,インターネットに接続する通信速度が高速化 されるにつれ,ネットワークを流れる通信量も増加し 続けている.今や国内における一日の最大通信量は,約158 Gbps にもなる.この通信量は,この5年で約 30 倍,この2年でも約2倍に増えている²⁾.

大阪府産業技術総合研究所では,1996年にそれま で府内に分散していた拠点を和泉市に新設した研究 所(以下,当研究所)に移転統合したことを機に,幹 線 100 Mbps, 支線 10 Mbps の所内ネットワークイン フラを導入した³⁾. それ以来,所内ネットワークは導 入当時の通信速度のまま稼動してきた. その一方で, 256 kbps の通信速度から始まったインターネットへの 接続は段階的に高速化され,現在は2回線を利用し, 100 Mbps と3 Mbps の通信速度で接続している.

このように研究所内のネットワーク速度がインター ネットへアクセスする速度より遅くなってしまったた め、インターネットの利用だけで所内ネットワークの 帯域が不足する可能性がでてきた.また、それだけで はなく機器の寿命という避けられない問題が生じてき た.これらの理由により、2005年度から所内ネット ワークの再構築を始めた⁴⁾.

本稿では、まず、ネットワーク接続に必要な通信の 仕組み、通信機器とケーブルについて説明し、その後、 再構築前のネットワーク構成、更新にいたる経緯、再 構築したネットワーク構成、そのときに生じた問題や 工夫について述べ、最後に、ネットワークの評価と全 体のまとめについて記す.

2. 通信の仕組み

(1) LAN (Local Area Network) で用いられる IP 通信の 仕組み

世界中を網羅するインターネットは複数のネット ワークの集合体である.それらのネットワークは,さ らに小さなネットワークから構成される階層構造を 持っている.このように,ネットワークは,より小さ なネットワークの集合といえる.

ネットワークにつながっているコンピュータには,

^{*} 情報電子部 制御情報系

^{**} 企画総務部 企画調整課

IP (Internet Protocol) アドレスと呼ばれる識別番号が 一意に割り当てられている. IP アドレスは0から255 までの値をとる4つの数値からなり,各数値はピリオ ドで区切られる.

異なるネットワーク間で通信する場合, IP アドレ スから相手のネットワークを識別して, 適切な経路選 択, つまり, ルーティングを行う. これを行う機器が ルータやレイヤー3スイッチである. 最近では, 処理 速度や価格の点から, レイヤー3スイッチがよく用い られている.

一方,同一ネットワーク内ではリピータハブやレ イヤー2スイッチが通信を中継する.リピータハブ は、コンピュータから送信されたデータを、送信先を 判断せずに接続されている全てのコンピュータに送 信する.一方、レイヤー2スイッチは、ネットワーク インターフェイスカードに割り当てられている MAC (Media Access Control)アドレスに従って送信先にのみ データを送信する.このため帯域を有効に利用できる ので、現在では、リピータハブに代わり、レイヤー2 スイッチが使用されることが増えてきた.

データ送信時,ルータやレイヤー3スイッチは,送 信先の IP アドレスが同じネットワークに存在するか を判断する.同じネットワークに存在しない場合は, 経路選択を行い,別のネットワークにつながっている ルータやレイヤー3スイッチにデータを転送する.送 信先が同一ネットワークに存在するときは,MAC ア ドレスをもとに,リピータハブやレイヤー2スイッチ を経由して,データが送信先に送られる.

(2) 通信を伝送する LAN ケーブル

伝送媒体の一つである LAN ケーブルは,用途やネットワークの構成に応じて様々な種類があり,10BASE5 などのように表示されている.最初の数字は通信速度 を示す.この場合,通信速度は10 Mbps である.最後 の数字は最長距離を示している.この場合は500 mで ある.最後が英字の場合もある.最後の英字がTで あればツイストペアケーブルを示し,その最長距離は 100 mである.LX,SX は,光ファイバケーブルを示 している.

最もよく用いられているツイストペアケーブル には、UTP (Unshielded Twist Pair)ケーブルとSTP (Shielded Twist Pair)ケーブルがある.UTPケーブルは オフィスなど一般用に使用される.ノイズ対策が必要 な工場などに敷設する場合は、導体などでシールドさ れたSTPケーブルがよく利用される.

ッイストペアケーブルの多くは,8本の線を2本ず つ4組にした4対8芯で構成されているが,10 Mbps, 100 Mbps の通信で使われているのは、そのうちの 2 対4芯だけである. そのため、10 Mbps、100 Mbps では、 2対4芯のケーブルでも通信することができる. 一方、 1 Gbps で通信する場合は、8本の線を全て使用する. そのため、2対4芯のケーブルでは1 Gbps で通信す ることはできない.

3. 旧ネットワーク構成

移転した当時に構築された幹線ネットワークの概略 を図1に示す.以降,移転当時に構築されたネットワー クを旧ネットワークと呼ぶ.

図1(a)は、建屋の位置関係を表している.当研究 所には、約8万2千平方メートルの敷地に十数棟の建 屋があり、それらは大きく分けて、新技術開発棟、本 館、実験棟に分かれる.図1(a)の実線で囲った部分 が1つのネットワークを示している.所内ネットワー クは、9つに分割されたネットワークから構成されて いた.なお、図中の計算機室はA棟の一部であり、A 棟と同じネットワークに属している.それぞれのネッ トワークは、ルータを介して FDDI (Fiber Distributed Data Interface)で接続されている.FDDI とは、伝送路 に光ファイバを用いた100 Mbps のリング型 LAN で ある.図1の各ルータを通っている実線が FDDI の配 線である.併せて、図1(b) に幹線ネットワークの構 成図を示す.

幹線ネットワークは、図2に示すように、ルータか ら各棟のフロアや実験棟などを単位として、さらに 分割されている.この分割されたネットワークを支線 ネットワークと呼ぶ.各支線ネットワークには、リピー タハブが設置されている.ルータからリピータハブへ





図2 旧ネットワークの支線ネットワーク図

は, 10BASE5 もしくは 10BASE2 のケーブルで接続されている.

リピータハブから末端の機器へは,主に,2対4芯 の UTP ケーブルを用いて,10BASE-T で接続されて いる.

4. 更新にいたる経緯

導入当初は快適な所内ネットワークであったが,年 月を経るに従い問題が生じてきた.その問題とは,導 入当時のインフラはもはや時代遅れとなってしまった ことである.

すでに述べたように、ネットワークの世界は進化が 速い.当研究所でも、10年前と比べるとネットワー クの利用頻度や一度に送受信するデータ量が格段に増 えた.その結果、所内の通信量は格段に増え、ネット ワークの帯域不足が心配され始めた.

また,ネットワークそのものだけでなく,ルータを はじめとする各種ネットワーク機器も古くなり,保守 部品の確保が困難になった機器のメンテナンス保守契 約が難しくなってきた.これにより,機器が故障する と所内ネットワークが停止し,業務が滞る可能性がで てきた.2006年度には,機器の寿命と考えられる軽 微なトラブルが,数度,発生した.

5. 所内ネットワークの更新作業

更新作業日程を表1に示す. 2005年度より1年半

表1 更新作業日程

	05/6	05/9	06/4	06/9
ネットワークの検討、設計				
ケーブルの敷設			•	
機器の設置、設定				
ネットワークの切り替え				



程度,所内ネットワークの再構築の検討と設計を行った.並行して,2006年度前半には,外部委託による 建屋間の光ファイバとフロア間のSTPケーブル,併 せて約1500mの敷設工事を数日間行った.2006年 度後半は,機器の設置と設定,および切り替え作業を 行った.この間で,ルータ9台をレイヤー3スイッチ 9台に,リピータハブ35台をレイヤー2スイッチ46 台に置き換えた.以下に新ネットワーク構成や,行っ た作業などを説明する.

(1) ネットワーク構成

新ネットワークの概略を図 3(a) に示す.併せて, 構成図を図 3(b) に示す.

幹線ネットワークの構成は,図1(b)に示すリング 型のFDDIから,図3(b)に示すツリー型のギガビット イーサネットに変更した.トポロジの変更理由には, 近年の幹線ネットワークはギガビットイーサネットが 主流であること,比較的安価で構築できることなどが 挙げられる.

ッリーの頂点には、レイヤー3スイッチを配置し、 計算機室に設置した. このスイッチをコアレイヤー3 スイッチと呼ぶ. 新ネットワークは、コアレイヤー3 スイッチを中心に、全体をおおむね建屋単位で8つに 分割し、各ネットワークには、レイヤー3スイッチを 配置した. 同じネットワーク内の実験棟および各フロ アは、さらに支線ネットワークに分割し、各支線ネッ トワークには、レイヤー2スイッチを配置した.

ギガビットイーサネットは、UTP, STPの 1000BASE-Tと光ファイバの1000BASE-SXの2種類 を利用する.1000BASE-Tは安価だが、100m以下の 接続に制限される.一方1000BASE-SXは高価だが、 550 m まで接続できノイズにも強い.

コアレイヤー3スイッチから各レイヤー3スイッチ へは、1000BASE-SXの光ファイバで接続している. これは、建屋間の距離が1000BASE-Tで接続できる最 長距離を越える部分があるため、また、各ネットワー クを電気的に絶縁し、トラブルを防ぐために講じてい る措置である.ただし、計算機室のレイヤー3スイッ チは、コアレイヤー3スイッチと同じラックに設置し ており、その距離が短いため1000BASE-Tで接続して いる.レイヤー3スイッチからレイヤー2スイッチへ の配線は、建屋内は1000BASE-TのSTPケーブルで、 建屋間は1000BASE-SXの光ファイバで接続した.支 線ネットワークのレイヤー2スイッチから末端の機器 へは既存のUTPケーブルを用い、100BASE-TX、も しくは10BASE-Tで接続した.

なお,ネットワークの再構築作業のうち,建屋間を 接続する光ファイバとフロア間を接続する STP ケー ブルの敷設工事は外部に委託した.それ以外の作業は, 機器選定から,機器の設置,設定,配線に至るまで, 職員が中心となって行った.

(2) IP アドレスの割り当て

更新に際し, IP アドレスは一部を除いて新旧ネット ワークで重複なく割り当てた.新しく割り当てた IP アドレスの割り当て規則を図4に示す.第一フィール ドから順に,固定値,棟単位,フロア単位,端末を表 している.

規則的に IP アドレスを割り当てたことで,2つの 効果があった.第一には,IP アドレスから容易に場 所を特定することができるため,トラブル発生時に素 早く対応できるようになったことである.第二には, レイヤー3スイッチとレイヤー2スイッチの設定ファ イルは IP アドレスの一部を除いて共通しているため, 各設定ファイルを IP アドレスの一部を書き換えるプ ログラムで自動的に生成できたことである.このこと で,作業の省力化につながった.

なお,計算機室のネットワークのみ IP アドレスを 変更していない.これは,コンピュータ室には多くの サーバがあり,アドレス変更に伴う作業が多くなるた めと,後に述べるように新旧ネットワークを接続して 共存した状態で移行するためである.

W	•	x	•	У	•	Z
第一フィールド	第二フ	ィールト	〝 第三フ	ィールト	〝 第四⊃	/ィールド
w:固定值,	x :棟	, y: 🗆	フロア,	z:端习	末	

(3) 末端ケーブル更新の検討

旧ネットワークでは、リピータハブの通信性能が 10 Mbps であった.そのため、末端の機器は 10 Mbps での通信となる.一方、リピータハブから置き換えた レイヤー2スイッチの通信性能は 1 Gbps である.と ころが、末端のケーブルが2対4芯のため、末端の機 器は最大でも 100 Mbps でしか通信出来ない.末端の 機器が 1 Gbps で通信するためには、2対4芯のケー ブルを4対8芯に置き換える必要がある.

しかし, 末端のケーブルは 700 本以上あるため, 全 てを置き換えるには非常に大きなコストを伴う. ま た, 通常の使用では, 100 Mbps で十分であり, さらに, 10 Mbps のリピータハブを 1 Gbps のレイヤー2スイッ チに変更したことで, 現状のケーブルのままで速度が 大幅に改善されることを考え, 今回は末端ケーブルの 置き換えは見送った.

(4) 設定作業

ケーブル敷設工事を終えた後,各棟,各フロアに, レイヤー3スイッチ,レイヤー2スイッチを設置した. その後,ケーブルを接続し,機器のランプが点灯する ことで物理的にケーブルがつながっていることを確認 した.

レイヤー3スイッチは, 主にポート VLAN (Virtual Local Area Network), DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol), SNMP (Simple Network Management Protocol) を設定した.

ポート VLAN の設定は、ポート単位でネットワー クの割り当てを行うために必要である. これによ り、実験棟やフロアを単位としたネットワークを構 築した. また、VLAN ごとに RIP (Routing Information Protocol) を有効にし、経路設定を自動化した.

DHCPの設定は、末端の機器をネットワークに接続 するだけで、自動的に IP アドレスの割り当てが行わ れるために必要である.また、ネットワークを越えて IP アドレスの割り当てが行えるように、リレー機能 を有効にし、リレー先アドレスとして DHCP サーバ のアドレスを指定した.この設定により、IP アドレ スの管理を一台の DHCP サーバに集約することがで きた.

SNMP は, ネットワークの監視を行うために導入した. SNMP エージェントを有効にし, 監視範囲を設定するコミュニティを作成する作業を行った. また, システムのメッセージなどを記録するログを設定した. これにより, 各ポートの状態変更やネットワーク帯域などの監視をネットワーク経由で行えるようになった.





(b) ケーブル差し替え後

その他,今後急速に普及すると言われている IPv6 なども設定した.

レイヤー2スイッチには, SNMP の導入とネゴシ エーションの設定を行った.

(5) 切り替え作業

図5に示すように,新旧のネットワークを計算機室 のスイッチを介して共存させた状態で,切り替え作業 を進めた.計算機室を介して新旧のネットワークを 共存させることができたのは,計算機室のIPアドレ スの変更を行っていなかったためである.

端末の切り替え作業は,図5(a)のように,配線盤 から旧ネットワークのリピータハブに接続している ケーブルを,(b)のように,配線盤から新ネットワー クのレイヤー2スイッチに一本ずつ切り替える方法で 進めた.端末あたりの移行作業時間は1分程度であり, 新旧のネットワークを混在させた状態で少しずつ切り 替えた.差し替えるケーブルの数は700本以上あった が,時間のあるときに少しずつ作業を進めることがで きたため,それほど負担にはなっていない.

なお、切り替え作業は、問題が発生してもトラブル を最小限に抑えるため、接続台数の少ないネットワー クから、確認しながら順次行った.移行完了後、一定 期間異常がないことを確認した後、旧ネットワークを 切り離した.

(6)移行に際しての問題点

移行に際し,問題も生じた.その一つは,IPアド レスを変更できない機器が存在したことである.ネッ トワークにつながっているのは,コンピュータだけで はなく,ネットワークにつなぐことのできる実験装置 もある.そのなかに,IPアドレスを変更することが 困難な実験装置があった.そのため,この実験装置の IP アドレスを変換してネットワークに接続する必要 がでてきた.これについては、旧ネットワークの IP アドレスを新ネットワークの IP アドレスに変換する NAT (Network Address Translation) ルータを利用する ことで回避した.

また,更新するとネットワークに接続できない機 器や端末があった.これは,レイヤー2スイッチで設 定した,通信速度の自動検出に失敗することが原因で あった.これについては,レイヤー2スイッチの設定 を変更し,通信速度を手動設定することで回避した.

さらに,旧ネットワークの図面と実際の配線が一致 していない部分があった.これは,引継ぎが確実に行 えていなかったことが原因である.そのため,今回は 注意深く次の更新に向けての資料を作成しながら移行 作業を行った.

6. 実験と考察

(1)2本の従来ケーブルによる1000BASE-T接続

今回のネットワーク更新では,末端の2対4芯のケー ブルは変更せず,端末は100BASE-TXで通信するこ とにした.しかし,今後さらにネットワークの通信速 度が高速になることが予想される.そのため,大きな 変更を行わずに,今ある設備で部分的に高速な通信を 実現できる環境を構築したい.そこで,この状態で高 速通信を検討し,2対4芯のケーブルを2本利用して 4対8芯とすることで,最大1Gbpsでの通信を試みた.

配線の概略を図6に示す.レイヤー2スイッチと配 線盤,および,スイッチの手前で4対8芯のケーブル と2対4芯のケーブル2本の変換を行った.この変換 部分は,モジュラージャックを用いて作成した.モジュ ラージャックを図7に示す.配線後,レイヤー2スイッ





図7 モジュラージャック

図5 新旧のネットワーク共存図



(b) 新ネットワーク

図8 転送速度の測定経路

チに端末を接続し,この端末と図6の端末間でネット ワークの帯域幅を測定したところ,750 Mbps となり, 1000BASE-T で接続されていることを確認した.

(2) 通信速度の測定

新しいネットワークでの通信速度を,以下に示す2 通りの方法で評価した.

まず,新旧ネットワークの速度変化を測定した.測 定は,図8に示す経路を通る,直線距離が200m程度 の本館と実験棟間で行った.旧ネットワークでは,ルー タ2台とリピータハブ2台が介在する.新ネットワー クでは,レイヤー3スイッチ3台とレイヤー2スイッ チ2台が介在する.測定条件は,1時間毎に約82M バイトのファイルを本館から実験棟の方向にFTP (File Transfer Protocol)で転送し,そのスループットを測定 した.結果を図9に示す.

図より,旧ネットワークでは,業務時間中(9時から18時)にスループットの谷が見られ,ネットワークが込んでいることがわかるが,新ネットワークでは,一日を通して,ほとんど変化が見られない.なお,新ネットワークの測定において,4時のスループットが低い理由は,ネットワーク経由のサーババックアップ処理が行われたためである.また,スループットの平均値は,7.82 Mbps から87.7 Mbps と,10倍以上向上している.

次に,(1)で検討した 1Gbps で通信できる支線ネットワークを利用し,通信速度が 1 Gbps のネットワークで測定を行った. その結果,スループットは約 300



図9 転送速度の測定結果

Mbps となった. この結果から, この測定では, 1 Gbps のネットワーク帯域を十分に使用していないこ とがわかる. これは, ネットワークの速度ではなく, ハードディスクの読み出し速度がボトルネックになっ ていると思われる.このことから,新しい環境ではネッ トワークがボトルネックでなくなったといえる.

7.おわりに

本稿では、当研究所のネットワークインフラを再構 築したことについて、新旧のネットワーク構成や工夫 点などについて報告した.また、どのくらい高速になっ たか評価し、結果を示した.

ネットワーク構築を自らが実際に行うことは、コス トの削減につながった.さらに、ネットワークの移行 に関するノウハウが蓄積できた.ネットワーク構築を 自らが実際に行うことは、今後の中小事業者への技術 支援に役立てることができる.

参考文献

- 1) 総務省編:ユビキタスネットワークの普及進展,平成18 年度版情報通信白書,ぎょうせい,(2006) p.12.
- 2) 総務省編:インターネットのトラフィックの推移,平成 18年度版情報通信白書,ぎょうせい,(2006) p.23.
- 3) 杉原俊介:大阪府立産業技術総合研究所平成8年度研究 発表会要旨集,(1996) p.90.
- 4) 平松初珠,中辻秀和,石島 悌:情報処理学会第69回全 国大会講演論文集第3分冊,(2007) p.13.

高分子製品中の有害物質のスクリーニング

Screening of Toxic Substances in Polymer Products

浅澤 英夫* 塚本 崇紘* Hideo Asazawa Akihiro Tsukamoto

(2007年7月17日 受理)

キーワード:環境負荷物質, RoHS, WEEE, ELV, 包装廃棄物指令, 有害金属, 蛍光 X 線, FP 法, 検 量線

1. はじめに

近年, EU での環境負荷物質規制 (RoHS, WEEE, ELV,包装廃棄物指令)の動向を受け,これら環境負 荷物質に関する生産管理の重要性が認識されるととも に,各社製品中のそれら環境負荷物質含有の有無や含 有量に関する分析の必要性が高まってきている.その 一環として,当所においても日用雑貨をはじめ機械電 気製品パーツなどの高分子製品に含まれる有害金属濃 度が,規制内であるかを簡便且つ迅速に確認する分析 方法が求められてきた.

高分子材料中の有害金属の定量分析には,原子吸光 分析法や高周波プラズマ発光(ICP)分析法が高感度で 信頼性の高い定量分析法として知られているが,酸分 解などによる試料の溶液化といった煩雑な前処理が必 要であり,熟練を要するとともに迅速性の面で難点が ある.

そこで,注目されているのがエネルギー分散型蛍光 X線分析法である.これは,試料の前処理をほとんど 行う必要がなく,簡便かつ迅速に簡易定性定量を行う ことができるため,当研究所においても,この機器に よる依頼試験および機器貸与が急増している.これら 測定法の特性の比較を表1にまとめた.

このエネルギー分散型蛍光 X 線分析法は,有害金属の分析能力として EU での有害金属規制濃度レベル に対応できる検出感度を有しているとされている.し かし,これらの規制に対応するための検査として使用

* 化学環境部 繊維応用系

するには,濃度既知の規制物質を含有する標準試料を 使用し,定量性や検出限界などを検定することによっ て,その信頼性を確認しておくことが重要である.こ こでは,その検討結果について報告する.

2. 実験方法

(1) 標準試料の調製

標準試料の市販品は存在するが,実験室レベルでの 標準試料調製の可能性を併せて検討するために自作す ることにした.

標準試料調製法としては,高分子材料中に金属粉末 または金属塩を加えて,熱プレスする方法があるが, 金属を均一に混合することが難しい.また,高分子材 料を有機溶媒に溶解し,その有機溶媒に溶解する有機 金属を使用する方法が考えられるが,溶媒除去に長時 間を要するだけでなく,気泡発生の問題が伴う.その ため,これらの問題が少ないとされる中野らの方法¹⁾ を採用した.この方法は,液体状である未硬化の不飽 和ポリエステルに有機金属を有機溶媒に溶解させたも

表1 測定法の特性の比較

分析手法		定量性	簡便性	
ICP		0	× 溶液化(酸分解等)	
原子吸光		0	× 溶液化(酸分解等)	
	蛍光 X 線	検量線法	0	\bigtriangleup
		簡易定性定量法	×	O



図1 標準試料の作成

のを混合して硬化剤で固め、標準試料を作製するもの である.

高分子材料は、市販の不飽和ポリエステル樹脂および硬化剤を用いた.また、鉛、クロム、カドミウム、 水銀の有機金属としては、テトラフェニル鉛、トリス(2,4-ペンタンジオナト)クロム(Ⅲ)、酢酸カド ミウム二水和物、酢酸水銀(Ⅱ)を用いた.なお、環 境負荷物質であるクロム(Ⅵ)を適用すべきではある が、一般的なエネルギー分散型蛍光X線分析法ではク ロムの価数を分別することはできない.したがって、 クロムに関しては有機溶媒への溶解性の面から、クロ ム(Ⅲ)を構成元素分とするトリス(2,4-ペンタンジ オナト)クロム(Ⅲ)を使用した.

以上の有機金属を使用し,金属元素として約1000 mg/Lを含むようにキシレンに溶解し,標準試料作成 における添加混合用の基準有機金属溶液とした.ただ し,酢酸カドミウム二水和物はキシレンに難溶性のた め,先にエチルアルコールに溶解の後,キシレンに加 えた.

標準試料作成の概略を図1に示す.金属濃度が0~200 µg/gの範囲内で5段階の濃度配分となるよう,混合用の基準有機金属溶液を不飽和ポリエステルに添加し,よく攪拌後,さらに硬化剤を加えて室温で硬化させた.図2に調製した標準試料を示す.

(2) 標準試料の検定

調製した標準試料が目的の濃度に調整できているか を確認するために,硫酸,硝酸,過酸化水素によるケ ルダール湿式分解処理をし,ICP分析装置(島津製作 所製ICPS-1000)により有害金属含有量の分析を行っ た.図3に適用した湿式分解法の概要を示す.



図2 調製標準試料





(3) 蛍光X線分析

調製した標準試料を用いて蛍光 X 線分析を行った. 蛍光 X 線分析装置は,島津製作所製エネルギー分散 型蛍光 X 線分析装置 EDX-800 を用い,EDX-800 操作 法の『検量線を用いた定量分析』ソフトにより分析し た.

それぞれの有害金属を精度よく分析するために,各 有害金属が検出されるエネルギー領域の蛍光 X 線強 度のバックグラウンドを下げる目的で一次フィルター を使用している.鉛,水銀については Ni フィルター, カドミウムについては Mo フィルターを使用した.

検量線作成の測定積分時間は,それぞれの有害金 属の分析チャンネルについて 300 秒で,強度計算は フィッティング法によった.



図4 一次フィルターの効果

図4にCdを分析する場合の一次フィルターの有無 による分析感度の違いを示す.照射するX線中にRh の特性X線を含むために,Cdの蛍光X線ピークが妨 害されて見えなくなっている(図4の左).Moの一次 フィルターを使用することで,Rhの特性X線を減ら して,Cdのピークが見えてくる(図4の右).なお, この分析試料のCd濃度は,75 µg/g である.

3. 結果と考察

(1) 配合計算値と ICP 分析値との関係

配合計算値(配合比率による計算値)とICP分析値 との関係を図5に示す.それぞれの有害金属について 配合計算値とICP分析値に良い一致がみられ,以下の 検討を加える上で適切な標準試料であることを確認した.

ただし,カドミウムの高濃度域では,予想と乖離し ているが,これは酢酸カドミウム二水和物が溶媒とし て使用したキシレンに難溶であることが原因と考えら れ,今後,溶解性を考慮した有機金属の選択によって 対処できると考えられる.

(2) ICP 分析値と蛍光 X 線分析値との関係

ICP 分析値と蛍光 X 線分析値との相関を図 6 に示した. なお,水銀については,配合計算値と蛍光 X 線分析値との相関を示した.いずれの金属に関しても,蛍光 X 線分析値は ICP 分析値もしくは配合計算値と良好な相関を示している.

検出限界濃度の算出には,測定のバラツキを考慮し た統計的な取扱いをする必要がある.しかし,定量下



図5 配合計算値とICP分析値の関係



限の概略は、図6の検量線から、安全を見積もってみ ても4元素とも50 µg/gの検出は可能と判断できる. これは、『検量線を用いた定量分析法』の結果である が、一般的な『簡易定性定量法』によっても、4元素 とも50 µg/g以上で検出できることが確認された.図 7 にクロムを例に蛍光 X 線分析での各濃度のピーク値 とベースラインの関係を示す.



図7 簡易定性定量法による Cr の測定例

4. まとめ

不飽和ポリエステルに有機金属を有機溶媒に溶解さ せたものを混合して硬化剤で固める中野らの方法によ り,高濃度領域のカドミウム標準試料を除いては,気 泡の発生もなく,含有金属が均一に混合された標準試 料を作製することができた.

また 4 元素ともに 50 μg/g が検出可能であり, この 蛍光 X 線を使用してのスクリーニングが可能である ことを確認した.

本検討ではポリエステル樹脂を適用したが,他の一 般高分子材料にも本検討結果を当てはめて応用,考察 できる.しかし,厳密には,それぞれの高分子材料ご とに同様の検討が必要であり,たとえば蛍光 X 線分 析で検出される塩素を含む塩化ビニル樹脂など,試料 のマトリックスが変化するような樹脂などについて は,特に注意が必要と考える.

参考文献

1) K.Nakano and T. Nakamura: X-ray spectrum., 32 (2003) p.452.

輸送包装の標準化と 3R

Standardization of Transport Packaging and the Local 3R(Reduce,Reuse,Recycle)

寺岸 義春 *Teragishi Yoshiharu

(2007年7月31日 受理)

キーワード:輸送包装,標準化, 3R (Reduce, Reuse, Recycle),包装貨物試験

1. はじめに

わが国で経済復興と産業発展のツールに輸送包装 の「標準化」が叫ばれ、大手の荷主企業や輸送事業 者、包装材企業で「標準化」の取組みが始まったのは 1960 年初頭である.以来、ほぼ 50 年が経過し、輸送 包装の「標準化」も包装材料、容器、輸送機器から評 価試験までJIS化が進み、さらに現在では生産のグロー バル化に伴い、国際標準化 (ISO) まで進展してきた.

一方,昨年,容器包装リサイクル法¹⁾と,環境負 荷低減のために省エネ法²⁾が改正(以下改正省エネ法 という)され,容器包装リサイクル法では3R(Reduce, Reuse, Recycle)の推進,改正省エネ法では大手の荷主 企業と輸送事業者に対して定期報告書によるエネル ギー消費量の報告やエネルギー使用原単位を前年比1 %削減する義務が課された.これを受けて輸送包装(大 手の荷主企業)の現場では,両法律を履行するため, これまで以上に標準化による輸送効率の向上と3Rを 推進しなければならない状況になっている.

ここでは,現状の輸送包装の標準化について解説し ながら,当所で実施している包装貨物試験等でできる 3Rや,これからの輸送包装のあり方について紹介す る.

2. 輸送包装の標準化の起源

物品などについて消費者の手元に渡すために施す 包装を消費者(生活者)包装といい,これに対して輸 送を目的として物品に施す包装を輸送包装と呼んでい る.

輸送包装の標準化の起源について調査した結果で は、前近代的な輸送包装の仕様(木箱、むしろ等)が 多く,人的荷役作業の生産性の低さや輸送中の内容品 を含む包装貨物の損傷に悩まされていた輸送事業者で ある国鉄 (JR の前進)と、大手の荷主企業である家電 企業や包装材企業と共に「輸送包装の標準化」を推 進した文献が多数 3-5) 発見された. これらは 1963 年 に創立した(社)日本包装技術協会(JPI)がその直後 に創刊した協会誌「包装技術」でみられ、その一つ に向野。 は当時の「包装の標準化」が生むメリット として、3S 運動の主旨① Simplification(単純化)、② Standardization(標準化), ③ Socialization(専門化)を 考慮した。a) 包装強度の標準化。b) 包装寸法の標準 化, c) 包装材料の標準化, d) 包装技法の標準化があ り、これらは「包装を標準化」するとき欠かせない項 目で、各項目で得られるメリットについて詳細に述べ ている.わが国の輸送包装の標準化の起源は、この頃 であると言える.

3. 輸送包装の標準化の現状

輸送包装の機能は、物品の流通過程においてそれを 保護し、ある単位を形成し、また内容および取扱上の 情報を伝達し利便性を附加することにある.問題は物

^{*} 情報電子部 信頼性·生活科学

品の種類や性状が多種多様で,流通には物的流通(物 流)と商的流通(商流)があり,物品には原材料,中 間加工品,部品,完成品のすべてが輸送包装という媒 体を介して流通している.このようなことから,輸送 包装の設計に関しては考慮すべき要因がすべて同じで はない.包装材の使用に関しては,容器包装リサイク ル法を考慮した材料選択や,高齢者や障害のある人々 に配慮したユニバーサルデザイン,改正省エネ法から は,CO₂削減のためこれまで以上に包装材を削減した 設計が望まれる.その内容は極めて広範になるためで きるだけ単純化した上で,パッケージデザインから包 装機械適正,輸送効率まで含めた包装設計,またこれ らの包装貨物試験まで包含した「輸送包装の標準化」 を完備させる必要がある.

(1) 社内基準

わが国で輸送包装の標準化の取り組みが始まった 1963年頃は,輸送機関や倉庫保管の設備も十分では なく,荷役は人的荷役が主で行われていた.出荷量が 拡大する大手家電企業等で輸送中の製品を保護するた め,輸送包装の社内規格作りが行われ,木箱から段ボー ル箱化への仕様変更も進んだ.また輸送包装設計の指 針となる包装材料規格や製品出荷時の包装貨物試験の 基準も作成された.これらの社内基準は公表されてい ないが,物流環境の調査を実施しながらその結果で見 直され現在も各社に存在する.

これらの社内規格は当時未整備の国内基準の整備 に影響を与え,特に1973年に制定⁷⁾されその後改訂 されながら現在も多くの企業で参照されている JIS Z 0200「包装貨物-評価試験方法通則」の原点になって いる.

(2) 国内基準 (JIS)

製品出荷時に行う輸送包装に関する代表的な包装 貨物試験規格(落下,振動,圧縮)は,1950年から 1960年の間に制定された.その当時府下企業の輸出 振興を支援するために実施していた包装貨物試験(依 頼試験およびその後の機器貸与)は,試験機も進化し, 現在も継続して多数の企業に利用されている.しかし, 当初の規格は試験機や試験方法についてのみ規定され たもので,輸送包装の設計指針になる試験基準(例え ば,落下高さ,振動条件,段ボール箱の圧縮強さ等) は各社で決める必要があった.

専門スタッフがいる前出の大手家電企業等は,輸送 環境記録計等を組み込んだダミー包装貨物を自社の 輸送経路で輸送し,その環境(衝撃,振動,温度,湿 度),保管倉庫ではこれに加えて保管状況(貨物の積 み上げ段数)を自社で調査し,その社内基準を作成で きたが、中小企業や他の企業は、基準の作成は難しく 公的な基準が求められるようになった. ほぼこのよう な経緯で制定されたのが、前出の試験基準を示した「包 装貨物-評価試験方法通則」である. この規格も現在 「ISO/IEC ガイド 21:1999」に基づいて国際化を図るた め ISO との整合化作業が進められている. この作業 を進める国内対策委員会に当所からも委員を派遣して いる.

(3) 国際基準

輸送包装の国際基準としては,前出の「包装貨物-評価試験方法通則」の附属書 2(規定)に ISO 4180/2「包 装貨物-性能試験計画,作成の一般規則-第2部:量 的データ」がある.また,米国の国内基準であるが, 極めて影響力の強い ASTM(米国試験・材料協会規格), MIL(米軍仕様書)や段ボール箱の仕様書等で知られ ているルール 41(鉄道運賃等級段ボール箱仕様書)や アイテム 222(米国トラック運賃等級段ボール箱仕様 書)がある.

自社貨物を国内,国外に出荷する場合,複数の包装 貨物を,機械および器具による取扱いに適するように, パレット,コンテナなどを使って一つの単位にまとめ たものを,一貫して効率よく輸送する方法をユニット ロードシステムという.この輸送包装の標準化設計の 指針となる基準に JIS Z 0650「ユニットロードシステ ム通則」がある.また,このユニットロードシステム を評価する試験に JIS Z 0170「ユニットロードシステム を評価する試験に JIS Z 0170「ユニットロードー安定 性試験方法」ISO 10531:1992(IDT)があり,この両規 格は,輸送包装の標準化を進めるために目指してきた 規格である.輸送効率を向上させるため,ユニットロー ドシステムで用いる JIS Z 0105 包装貨物-モジュール 寸法が 1970 年に制定され,その後改正され今日に至っ ている.

表1はこの規格の包装モジュール寸法を示したもの で、JIS Z 0161 の 550 × 366 mm から導かれるものと、 ISO 3394 の 600 × 400 mm から導かれる包装モジュー ル寸法が示されている.わが国では、1964 年に JIS D 6002 に鉄道輸送用として 1100 × 1100 mm のパレッ トを標準として JIS 化し、当時の国鉄は、大手荷主に この標準パレットの使用に特典(パレット運賃、返回 送費の免除等)を与え標準パレットの普及を図ってき た.しかし、国外では米国(1219 × 1016 mm)、欧州(1200 × 800 mm)の標準パレットが普及しており、ISO は欧 州の標準パレットを規定していた.1992 年 ISO/TC51 マドリード会議において ISO 6780(パレットの主要 寸法規格)の改正を提案し、以来 10 年に及ぶ欧米諸

表 1	句装モジュ	ールオ法	単位 mm
1X 1		10 112	\rightarrow \rightarrow γ

JIS Z	0161	ISO 3394		
550 ×	366 mm	$600 \times 400 \text{ mm}$		
から導	かれる	から導かれる		
包装モジェ	ュール寸法	包装モジュール寸法		
項目	寸 法	項目	寸 法	
	1100×1100		1200×1000	
	1100×733		1200×800	
倍数系列	1100×550	倍数系列	1200×600	
	1100 × 366		1200×400	
	733×550		800×600	
包 装 モジュール	550 ×366	包 装 モジュール	600 × 400	
	275×366		300×400	
	183×366		200×400	
	137×366		150×400	
	110×366		120×400	
	550×183		600×200	
	183×183		300×200	
分割系列	137×183	分割系列	200×200	
	110×183		150×200	
	550×122		120×200	
	275×122		600 × 133	
	183×122		300×133	
	137×122		200×133	
	110×122		150×133	
			120×133	
			600×100	
			300×100	
			200×100	
			150×100	
			120×100	

国との折衝の結果,2003年にわが国の標準パレット 1100×1100 mm が国際規格に認知された.

(4) 輸送事業者による輸送包装の基準

個人のインターネット(以下ネットという)加入者 の急増とともに、ネットを利用した個人取引が増加し てきた.店頭販売でないこれらの輸送経路は、従来の 大手の荷主企業が商品を輸送していた経路とは違い、 個人に直接宅配される.利便性が高いため今後もさら に増加すると考えられるが、これまで自社の輸送経路 で築いてきた輸送包装仕様の基準を見直し、ネット商 品に対して包装仕様を変えている企業もある.

一方,最近,府下でも欧米の国際輸送事業者の集配 (宅配)車を日常的に見かけるようになってきた.こ れらは自社の貨物専用機を全世界に就航させ,陸上 輸送と組み合わせた EDS(エキスプレス・デリバリ・ サービス)で高付加価値商品の物流をドア・ツー・ド アで一括して引き受けることができる国際輸送事業者 の集配車である.現在,よく見かける国際輸送事業者 は,米国の FedEx 社, UPS 社,ドイツの DHL 社,オ ランダの TNT 社の4社で,現在日本の国際物流(宅配) 市場の7割をこの4社で扱っていると言われている[®].

FedEx 箱の強度ガイドライン					
内容物の	箱の最大寸法	破裂強さ			
最大許容重量					
(kg)	(cm)	(kPa)			
	両面段ボール箱				
10	120	640			
13.6	191	1379			
20	150	785			
18.1	191	1379			
22.7	216	1724			
29.5	241	1896			
30	175	1180			
36.3	267	2413			
40	200	1570			
複両面段ボール箱					
20	150	785			
27.2	216	1379			
30	175	980			
36.3	241	1896			
40	200	1380			
45.4	267	2413			
50	290	1770			
54.4	279	2758			
63.5	292	3447			
68.0	305	4137			

表2は、FedEx 社(以下F社という)が、ネット上 で公開している自社の梱包の手引き⁹⁰である.これは 荷主に対して出荷時に用いる段ボール箱の強度を示し たものに、JIS でこれに関連する JIS Z 1506 外装用段 ボール箱で示されている最大総質量と最大寸法、JIS Z 1516 外装用段ボールで示されている破裂強さを並 べて(太字が JIS 値、斜文字がF社値)示したもので ある.

表2で見られるように国際輸送事業者が箱の強度ガ イドラインで示す段ボール箱に対する各数値は,JIS 値よりかなり高い数値まであり,JISより多様な包装 貨物に対応していることが分かる.この箱の強度ガイ ドラインはF社独自の基準ではなく,同業のUPS社 も同じ基準を示している.これは,両企業とも前出の アイテム222や同じ内容のルール41を採用している ことによる.さらに,両規格は輸送事業者が作成した ものであるが,米国ではMILやFS(米国連邦仕様書・ 規格)にも引用されている.その主旨は,①貨物の 取扱い,配送による破損を防ぐ②破損発生時の報償 体制整備と③米国のような広大で多数民族国家では, これらの施策が必要とされている. 現在のところわが国の輸送事業者で,輸送用段ボー ル箱強度を盛り込んだ梱包の手引きを作成していると ころは見あたらない.しかし,今後日本の輸送事業者 も国際化のため再編が進み,欧米の企業と同じような 梱包の手引きを持つ企業が出現してくると思われる. さらにF社の梱包の手引きでは,壊れやすい商品には 大手の荷主企業で緩衝包装が施されている包装貨物で も,再度この箱ごとエアー緩衝材等で包んでから箱詰 めをする二重箱包装を行うよう指示している.これに 対し大手の荷主企業では,国外への出荷時には自社包 装貨物でコンテナを満たし,できる限り人的荷役が伴 わないユニットロード化した輸送で,貨物の安全を確 保するような対策をしている.

(5) 輸送包装の標準化と輸送効率

物流の輸送効率を向上させるため,ユニットロード システムで用いる JIS Z 0105 包装貨物-モジュール寸 法については,(3)項ですでに国際規格に認知されて いることについて述べた.輸送包装の標準化が輸送効 率を向上させる例を表3に示す.表3は大手飲料の荷 主事業者で実用されているパレット積み付けパターン とユニットロードを示している.大量生産される事業 者では,ロボットによるパレット上への包装貨物の積 みつけを最も効率よくし,自動倉庫からトラックに積

表3 パレット積み付けパターンとユニットロード



み込む荷役も極めて短時間でほぼ自動で行えるように なっている.

4. 包装貨物試験の実施と 3R

大手出荷事業者の輸送包装の現場では,常に前出の 輸送包装の標準化や近年の環境問題から大きく叫ばれ るようになった 3R について,これまでも様々な取り 組みがなされてきた.また,出荷する包装貨物につい ては,自社の包装仕様で輸送中(荷役を含む)の危難 から製品を保護できることを確認するために包装貨物 試験が行われている.ここでは,当所でも行っている 包装貨物試験で実施できる省資源への取り組みの提案 と関係事業者から最近公表された再使用の事例を2例 紹介する.

(1) 製品衝撃強さの向上による取り組み (Reduce)

通常の製品は輸送中に生じる落下衝撃から製品を保 護するために,緩衝材を用いた緩衝包装が施されてい る.この際の設計は,輸送中に想定される落下高さか ら製品を保護するために緩衝材(支持面積,厚さ)を 設計基準に沿って使用する.図1は(社)日本電機工 業会に加盟する大手家電企業が出荷する各社の主要製 品の包装貨物の総質量と落下試験高さの関係を示した ものである.

図1でみられるように底面落下の落下高さは,前出 のJIS Z 0200 のレベルIで,底陵落下高さはレベルII であると報告¹⁰⁾している.これらの企業は,早くか ら輸送包装関係の専門スタッフが常駐し,輸送中の衝 撃に対する製品の耐衝撃性を向上させることにも取り 組んでいる.

製品の耐衝撃性を向上させることで,包装貨物の緩 衝材を削減または製品の固定のみの包装設計が可能に なるので紹介する.それは,JIS Z 0119 包装及び製品 設計のための製品衝撃強さ試験方法に記されており, この試験で用いる自由落下型衝撃試験機例を図2に示 す.この試験には,許容速度変化試験(A法)と許容 加速度試験(B法)がある.図3にこの試験で得られ



図1 落下高さと総質量の関係



図2 自由落下型衝撃試験機例

る製品の損傷境界線図を示す.

A 法は製品が製造過程や携帯時など,包装が施され ない環境下で耐えられる許容速度変化を決定する試験 である.図2に示すように衝撃台に供試品を取り付け, 図3の試験 No.1~5で示すように,損傷が発生しな いと予測できる落下高さトから試験を開始し,衝撃を 加えた後に損傷の有無を検査する.供試品に損傷がな ければ前回と同じ方法で,供試品を衝撃台に取り付け, 損傷が認められるまで加速度を増加して試験を繰り返 す.供試品に損傷が認められた試験の1回前の試験に よる速度変化を許容速度変化という.このA法では 衝撃持続時間の短い(3 ms以下)正弦半波を衝撃パル スとして用いる.

これに対して B 法は緩衝包装設計のための許容加 速度 を決定する試験である. A 法で求めた許容速度 変化の約1.6 倍以上になるように衝撃台の落下高さh を設定し,図3の試験 No.7~11 で示すように,損傷 が発生しないと予測できる落下高さhから試験を開始 する.衝撃を加えた後に損傷の有無を検査しながら, 試験を続ける方法および許容加速度を決定する方法 は,A 法のときと同じである. この B 法では衝撃持 続時間の長い台形波を衝撃パルスとして用いる. この ように対象の供試品について A 法で求めた許容速度 変化 と B 法で求めた許容加速度 で結んだ曲線を損傷 境界曲線と言う.

図3でも見られるように,この曲線で供試品が衝撃 で破損する損傷領域と衝撃で破損しない非損傷領域を 明らかにすることができる.しかし,A法で求めた許 容速度変化が流通(輸送)過程で製品が受ける速度変 化よりが大きい下記のような場合,

 $V = (1+e)\sqrt{2gh} < Vc$

- ここに、V:流通過程で製品が受ける速度変化 (m/s) Vc:供試品の許容速度変化 (m/s)
 - h : 落下高さ(m)
 - g :重力加速度 (9.8 m/s)



図3 損傷境界曲線

e : 反発係数 (不明なときは 1.0)

B 法の試験を省略してよい.

最近では,携帯時に誤って落としても簡単に破損し ない許容速度変化値の高いモバイル製品が出現してき ている.これからは他製品についても試作段階でこの 試験を実施し,脆弱部分を削除しながら,できる限り コストを掛けずに設計変更等で製品の耐衝撃性を向上 させ,その成果として包装仕様の簡易化で包装材の省 資源が可能になる.また,非線形製品の製品衝撃強さ 試験については,当所の中嶋の報告¹¹¹を参照してほ しい.

(2) 複合荷重負担包装による取り組み (Reduce)

製品が入った段ボール箱包装貨物は,輸送中や保管 時に積み重ねられる.この間,積み重ねられた貨物質 量が最下段の段ボール箱や製品に積載(死)荷重とし て働き,段ボール箱の圧縮強さが積載(死)荷重に対 して不十分なとき,段ボール箱や製品に損傷が発生す る.このような現象を防止するため前出のJISZ0200 5.5 圧縮試験では,次式によって算出した荷重を加え, 直ちに取り外す試験を行っている.

 $F = 9.8 \times K \times M \times (n-1)$

ここに, F:荷重 (N)

K:負荷係数

n:流通時の最大積み重ね段数

M:供試品の総質量(kg)

負荷係数は,安全率のようなもので保管時の負荷(積 載)の状況と容器の吸湿性等により,1から7まで決 められている.

積み重ね保管時に,①内容品及び内装容器が荷重を 負担し,外装容器が荷重の負担を考慮する必要がない 場合は,容器の吸湿性に関係なく負荷係数は1である. 前出の報告で家電製品の冷蔵庫,洗濯機,エアコンの 室外機等は,積み上げ荷重が大きい製品に改善し,負 荷係数が1の包装が施され積み重ね保管時の荷重は,



図4 複合荷重負担実験の試料 (深さ+5mmの試料)

製品が受けている.このような包装仕様を採用することで,包装材の省資源化を図って成功している.

これに対して ②内容品, 緩衝材, 外装容器等が複 合して荷重を分担するときの負荷係数は, 吸湿性に 伴って2~4と高くなっている. さらに負荷係数が5 ~7は ③段ボール箱等の外装容器だけが荷重を負担 する場合である. ここで, ②のような包装仕様が採 用されるときの段ボール箱の圧縮強さと箱深さの関係 をみるために, 段ボール箱試作機で箱深さの内寸法よ り+5 mm, +3 mm, ±0 mm, -3 mm, -5 mm の段ボー ル箱(両面 A 段)を各3箱試作した. これらの段ボー ル箱(両面 A 段)を各3箱試作した. これらの段ボー ル箱にアクリル板製ダミー製品(外寸法:380×280 × 250 mm, 質量:12.3 kg)を厚さ 40 mm の緩衝材(15 倍発泡のコーナパッド)で支える包装仕様の段ボール 箱包装貨物(図 4 参照)を試料とし, 前処置(温度: 23 °C, 相対湿度:50 %, 24 時間)後圧縮試験を行った.

図5に各試料の最大圧縮強さ平均値を,空箱の最大 圧縮強さを基準に,箱深さと最大圧縮強さの関係で示 したが,いずれの場合も空箱より最大圧縮強さは高く なっており,実用上は作業性が悪くなるが,箱深さを 内寸法より少なくした方が高い値を示している.複合 荷重負担包装は,本実験結果でも段ボール箱の最大圧 縮強さが空箱に比べて,通常の内寸法でも49%高く なることが分かった.このことは,従来の段ボール箱 の材質の見直しや,最近普及し始めたC段(段形状が Cの両面段ボール箱)への移行等で包装仕様が変更し やすくなり省資源が図れることを示している.

実際に省資源化を進めるときは、包装貨物試験を並 行して行うのが基本であると考える.

(3) これからの包装貨物振動試験よる取り組み (Reduce)

包装貨物の耐振性を評価する振動試験の規格には, 前出のJIS Z 0200 (1999), JIS Z 0232 (2004) 包装貨物 -振動試験方法, ISO, ASTM, MIL 等があり, 振動 条件は, 一様振動, 掃引振動, ランダム振動がある.



図5 荷重分担時の段ボール箱の圧縮強さと 箱深さ(内寸法)



図6 非線形振動対応型の試験装置

これらの規格や振動条件に対して関係企業の実施状況 は、一通りではなく、前出の大手家電企業が実施して いる振動条件も、報告¹⁰⁾では各社の主要製品の包装 貨物の振動試験に、この一様振動、掃引振動、ランダ ム振動が採用されている.

また,振動加速度や加振時間も各社で異なっている のが現状である.これは,自社基準の違いもあるが, 輸送機関(トラック,貨車,船,飛行機等)の違いや 仕入れ先(輸出)との契約に試験条件が付帯している 場合,契約にある試験条件を取り入れる事などから生 じている現象である.しかし,各社とも輸送時と等価 な試験条件で自社の包装貨物を評価し,常に省資源を 考えた包装設計に腐心している状況にある.

当所では、中嶋らが IMV(株)と共同で試験条件が 自動的に導出でき、包装貨物振動試験で多くみられる 非線形振動に対応できる次世代振動耐久性評価装置お よびシステムを開発した、開発した試験装置を図6に 示したが、本システムの特徴は、次の2点になってい る.

(A) システムの特徴(特願 2003-424895)

①非線形対応型 輸送中の包装貨物の振動伝達特性 は多くの場合,非線形(ガタ振動,叩き合い振動,液 体振動など)であることから本システムでは,セン サー計測データを用いることにより非線形振動伝達を

考慮した試験を可能にした.

②蓄積疲労スペクトル 試験条件導出には,周波数 毎に独立してその蓄積疲労を評価できる蓄積疲労スペ クトルという概念を導入した.

また,新しい機能としては,次の4点が上げられる. (B) システムの機能 (特願 2006-116890)

①輸送シナリオ作成機能 公開されている代表的な 輸送振動がデータベース化されており,複数の輸送経 路を and, or などの論理演算式により輸送シナリオと して結合できる.

②市場許容破損確率の設定機能 市場許容破損確率 を入力することにより,試験の厳しさが補正できる機 能を搭載した.

③試験条件の自動導出機能 担当者の経験を数値 データに換算でき誰もが容易にその導出根拠が把握で きる.

④振動応答の異状監視機能試験中に試料の異状がわ かり、より正確な耐久性が把握できる.

以上, IMV(株)と共同開発した次世代振動耐久性 評価装置およびシステムについて簡単にふれたが,詳 細については,日本包装学会の「蓄積疲労評価型振動 試験システムの提案」¹²⁾で報告している.

(4) 包装材再使用 (Reuse) システムの例 1¹³⁾

建築現場には,建築中に建物に設備される機器が多 く納入される.機器の納入後その役割を終えた段ボー ル等包装材の使用量の削減は,これまでも大きな問題 で,建築事業者と納入事業者の間で可能な機器からで きる限り包装材を使用しない輸送包装形態を採用する などの対策がとられてきた.

図7に示す包装材の再使用システム例1は,給湯器 の製造事業者N社が,H社と共同で開発したもので, 図7でも示すように包装仕様は製品の上下を緩衝性の あるプラスチック製トレーではさみ,バンドで固定し た後にフィルムで覆う形式である.建築現場で外した プラスチック製トレーを再び製造工場へ戻し,再使用 の前にトレーの検査を実施し,問題がなければ包装材 として再使用するシステムである.

N 社の落下試験で,20回の再使用に相当する衝撃 を連続して加えた結果,著しい劣化はなく良好な結果 が得られている.ここでは自社製品の包装材を自社内 の閉ループでリユースする例として紹介した.

(5) 包装材再使用 (Reuse) システムの例 2¹⁴⁾

前項(4)では自社内の閉ループで包装材をリユース する例を示したが、それに対してネット上で運営する、 基本的には開ループのシステムを紹介する.

図8に示す包装材の再使用システム例2は、O社が







図8 包装材の再使用システム例2

開発したもので二つのシステムと多数の輸送事業者か ら成り立つシステムである.二つのシステムの一つは 包装材の管理システムで,他の一つはトラック等の物 流マッチングシステムである.ここでの包装材は事業 者の業種により異なるが,段ボール,プラスチック製 段ボール,スチールパレット,フレコンバッグ,溶接 ワイヤー包装ドラム,オリコン等である.これらの包 装材に認識コードを貼付することで,回収・選別・修 繕を可能とし,再び元の利用製造工場にその包装材を 再販するシステムである.

全ての種類の包装材に適合させる必要は無く,利用 事業者の要望を前提とした上でリユース (Reuse) に適 した包装材のみに適合し,また全量回収を保証するシ ステムではなく,回収できたものの中から再利用可能 なものだけを納品するシステムである.本システムは, リユース (Reuse) で難しいと言われている効率や費用 が,利用者が増えるほど効率が上がり,費用の削減や 環境負荷を低減できるシステム例として紹介した.

5. おわりに

現状の輸送包装の標準化について解説するととも に、当所で実施している包装貨物試験等でできる 3R についても検討した.その結果、輸送包装の標準化に ついては、関係者の長年の努力で標準化の基本である 包装モジュール寸法も国際化され、輸送効率の良いユ ニットロードシステムが国内外で可能な状況にある. すでに包装モジュール寸法を取り入れ、輸送効率を上 げ省エネ法への対応が進んでいる荷主事業者もある. 今後はこれまで困難であるといわれていた工業製品等 でもできる製品から標準化を図り、多くの標準包装材 の出現でこれまで以上に包装材の削減に努める必要が ある.

一方,包装貨物試験の実施で行う 3R では,①自由 落下型衝撃試験機を用いる製品衝撃強さ試験 ②複合 荷重負担包装 ③これからの包装貨物振動試験の各取 り組みについて述べた.関係する試験を実施してその 結果を見てほしい.さらに,包装材再使用システム (Reuse)を自社内で行う閉ループと多数の事業者が参 加する開ループで行う2例を紹介した.今後,このよ うなシステムは益々注目を集めると考えるが,ここで も,標準包装材を用いより多くの事業者が参加したシ ステムを完成させることが,必要になってくる.

謝 辞

本稿の作成にあたり資料提供を依頼したところ快く 提供下さった,日立物流(株)の松田考司,(株)ノー リツの永見静太郎,オリオンテック(株)の島田正春 の各氏に謝意を申し述べます.

参考文献

- 1) 容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する 法律,制定 1995,改正 2006.
- 2) エネルギーの使用の合理化に関する法律,制定 1979,改 正 2006.
- 3) 片山伊代吉:包装技術, 1 (1963) p.17.
- 4) 長谷川良雄:包装技術, 1 (1963) p.45.
- 5) 中山武男:包装技術, 3 (1965) p.34.
- 6) 向野元生:包装技術, 3(1965) p.12.
- 7) JIS Z 0200 (1973); 適正包装貨物試験方法通則.
- 8) オークラ物流システム情報誌 [シーズ], 43,5 (2007) p.2.
- 9) フェデックスエキスプレス: URL http://www.fedex.com/ downloads/jp/packagingtips/howtopack.pdf/.
- 10)(社)日本電機工会包装委員会,包装技術, 43 (2005) p4.
- 11) 中嶋隆勝: 神戸商船大学学位論文 (2003) p.3.
- 12) 中嶋隆勝, 津田和城, 川田浩二, 山内桂門:日本包装学 会誌, 16 (2007) p.41.
- 13) (株) ノーリツ: URL http://www.noritz.co.jp/eco/houkoku/ housou.html/.
- 14) 島田正春:日本ロジステックシステム協会講演資料,8
 (2006)(オリオンテック(株):URL http://www.orion-tec.co.jp/powerpoint.htm/.)